

# 小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅳ

戸津シンブザワ遺跡

埴田後山明神4号墳

葉師遺跡

2008. 3

石川県小松市教育委員会



## 例 言

1. 本書は石川県小松市内において小松市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査（現地調査・出土品整理・報告書刊行）は、文化庁補助金を受けて実施した。
3. 対象となった埋蔵文化財、及び調査地・調査原因・調査面積・調査期間（現地調査）・調査担当者は次のとおりである。

### 【戸津シンブザワ遺跡】

- 〔調査地〕 石川県小松市戸津町・林町地内
- 〔調査原因〕 記録保存（遺跡の崩壊・流出が懸念されたため）
- 〔調査面積〕 400㎡
- 〔調査期間〕 平成11年10月19日～平成12年3月23日
- 〔調査担当者〕 橋本正博

### 【埴田後山明神4号墳】

- 〔調査地〕 石川県小松市埴田町地内
- 〔調査原因〕 畑耕作中の主体部発見
- 〔調査面積〕 20㎡
- 〔調査期間〕 平成12年8月1日～8月11日
- 〔調査担当者〕 梶田 誠・橋本正博

### 【薬師遺跡】

- 〔調査地〕 石川県小松市矢崎町地内
- 〔調査原因〕 店舗建設
- 〔調査面積〕 350㎡
- 〔調査期間〕 平成18年4月24日～6月8日
- 〔調査担当者〕 坂下義規

4. 出土品整理は、戸津シンブザワ遺跡・埴田後山明神4号墳を岩本信一が、薬師遺跡を坂下が担当し、臨時作業員を雇用して平成18・19年度に実施した。
5. 本書の執筆・編集は岩本・坂下が行った。なお第1章第2節の1. 南部丘陵の遺跡及び2. 東部丘陵の遺跡については、『林タカヤマ窯跡』（小松市教委1999）、『後山無常堂古墳・後山明神3号墳』（小松市教委1989）中の「遺跡の位置と環境」から抜粋・一部改変し、再録したものである。
6. 発掘調査に係る図面・写真・出土品等の資料は、小松市教育委員会で保管している。
7. 本書についての凡例は以下のとおりである。
  - （1）本書に示す方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標Ⅶ系に準拠した。
  - （2）本書に示す水平基準は海抜高であり、T.P.（東京湾平均海面）による。
  - （3）遺物番号は各章（各遺跡）ごとに、本文・遺物観察表・挿図・写真図版とで一致する。
  - （4）土層及び遺物の色調は、『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修）に基づき表示した。



# 第I章 位置と環境

## 第1節 地理的環境

小松市は石川県南部に位置する市域面積371.13km<sup>2</sup>、人口11万人弱の都市である。市域は北西部で日本海に面し、西は加賀市、北は能美市、東は白山市、南は市域の最高峰である大日山（標高1,368m）を境に福井県勝山市と接する。南北に長い市域は、大部分が山岳地とそれに続く丘陵地であり、北西部の狭小な平野部に市街地と農地が集中している。

市街地が広がる平野部は、北部の梯川及びその沖積平野と、南部の月津台地と加賀三湖及びその潟埋積平野とに大きく二分できる。梯川は県下では手取川に次ぐ規模をもつ一級河川で、白山山系大日連峰の鈴ヶ岳（標高1,174m）を水源とし、郷谷川・湊上川などと合流し軽海町付近で平野部に出、これより西方に向い迂回曲流して鍋谷川・八丁川と合流したのち小松市街北部をかすめ、木場潟より発する前川と合流して日本海に注いでいる。古来より幾度となく氾濫を起こしてきた河川ではあるが、稲作に適した立地から、流域には現在も水稲単作を中心とする農業地帯が広がっている。また、梯川は流れが遅いため水系の集落間や日本海とを結ぶ水運路としても利用されてきた。



第1図 小松市の位置

月津台地は、江沼丘陵から北にせり出す標高10～20mの中位海成段丘であり、台地の周囲には加賀三湖と総称される今江潟、木場潟、柴山潟と、その潟埋積平野が広がる。加賀三湖はかつては日本海の入江であったが、浜提列で海と隔てられ潟湖となったものである。柴山潟、木場潟はそれぞれ今江潟へ連なり、今江潟は梯川を経て日本海と結ばれていた。しかし、昭和27年に開始された三湖国営干拓事業により、今江潟の全域、柴山潟の約2/3が失われ、かつての水郷風景も幻の景観となってしまった。

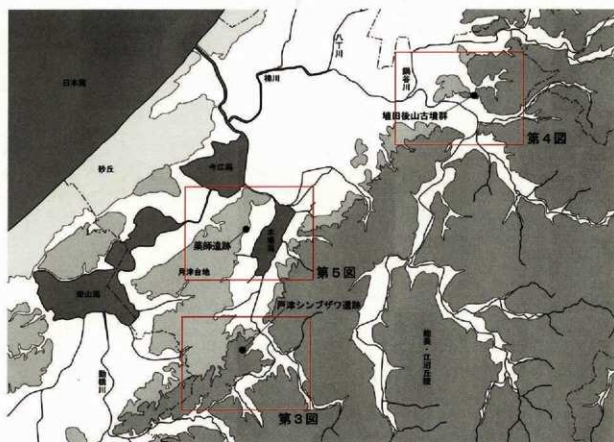
## 第2節 歴史的環境

### 1. 南部丘陵の遺跡

南部丘陵上には、須恵器・埴輪・土師器・甕器系窯跡を総称した、南加賀古窯跡群という県内最大規模を持つ窯跡群が存在している。その分布域は、小松市林町・戸津町から加賀市松山町までの間で、その数は、須恵器窯跡約195基、土師器窯跡約60基、甕器系中世陶器窯跡（加賀古窯・加賀焼）39基を数える。須恵器生産は、6世紀初頭から10世紀中頃まで営まれ、その間、6世紀には埴輪併焼、10世紀には瓦併焼、8～10世紀には土師器併焼及び土師器焼成坑も多く営まれる。

中世加賀古窯の生産は、須恵器生産が停止してから約200年の間をおいた12世紀の後葉に、常滑系の甕器系陶器として開始される。13世紀後半から14世紀中頃にかけて生産のピークを迎え大甕等を量産している。その後、14世紀末か遅くとも15世紀初めには生産を停止する。その分布は、須恵器窯より奥まった谷で認められ、須恵器窯がほとんど存在しない那谷川・馬場川より南東の丘陵にも多数存在する。

この南加賀古窯跡群の分布地域は、古代の製鉄跡が存在している区域でもある。現在までに約40ヵ所が確認されている。製鉄跡は、この地域から北東へ木場町、三谷町、蓮代寺町にかけての低丘陵上に広がって分布していて、7世紀初頭から12世紀後葉頃までのものが確認されている。



第2図 小松市の地形と遺跡の位置 (S=1/12,000)



第3図 戸津シンブザワ遺跡と周辺の遺跡 (S=1/25,000)

No.	遺跡名称	種別	時代	No.	遺跡名称	種別	時代
	戸津シザワ遺跡	竊取・製鉄跡	平安	33	上荒原シザワ2遺跡	竊取・製鉄跡	古墳・平安
1	矢田野神社前遺跡	散布地	平安	34	上荒原1号2遺跡	竊取・製鉄跡	平安・鎌倉
2	中村古墳	古墳	古墳	35	上荒原1号3遺跡	竊取・製鉄跡	鎌倉
3	林八幡神社跡	経度(清堀)	鎌倉	36	小山田跡1号遺跡	製鉄跡	
4	井口遺跡	散布地	奈良・平安	37	小山田跡2号遺跡 (小山田A遺跡)	製鉄跡	
5	矢田野長尾山遺跡	竊取・製鉄跡	平安・鎌倉	38	井口跡2遺跡	製鉄跡	
6	矢田野向山古墳群	竊取	奈良	39	井口神社遺跡 (井口神社跡)	製鉄跡	
7	二ツ塚山遺跡	竊取・製鉄跡	奈良	40	西原山跡1号2遺跡 (西原製鉄跡)	製鉄跡	
8	二ツ塚山古墳群	竊取	奈良・平安	41	西原山跡2遺跡	製鉄跡	
9	二ツ塚山古墳群	竊取	古墳・奈良	42	牧口中重墓(牧尾塚)	墳墓	鎌倉～室町
10	二ツ塚山古墳群	竊取・製鉄跡	奈良	43	牧口社2遺跡(牧口製鉄跡)	製鉄跡	
11	二ツ塚山跡1号古墳群	竊取	平安	44	白山跡1号遺跡	製鉄跡	
12	二ツ塚山跡2号古墳群	竊取	古墳・奈良	45	藤谷小天王谷1～3号製鉄跡	製鉄跡	
13	二ツ塚山跡3号古墳群	竊取	古墳	46	藤谷小天王谷古墳群	竊取	鎌倉
14	二ツ塚山跡4号古墳群	竊取	古墳・平安	47	藤谷大天王谷古墳群	竊取	鎌倉
15	二ツ塚山跡5号古墳群	竊取	古墳	48	二ツ塚山跡古墳群	製鉄跡	
16	二ツ塚山跡6号古墳群	竊取	古墳～平安	49	二ツ塚山跡古墳群	竊取	平安末期
17	二ツ塚山跡7号古墳群	竊取	奈良～平安	50	藤谷跡1号2遺跡 (藤谷1号跡)	竊取・製鉄跡	鎌倉
18	二ツ塚山跡8号古墳群	竊取・製鉄跡	奈良・平安	51	二ツ塚山跡3号古墳群	竊取	
19	林跡跡寺跡	寺院跡	中世	52	矢田野1～2号掘穴	掘穴墓	
20	林跡跡	竊取・製鉄跡	古墳～平安	53	藤谷1～3号掘穴	掘穴墓	
21	戸津古墳群	竊取	古墳・中世	54	藤谷中山谷遺跡	竊取跡	
22	戸津六字ヶ丘古墳群	竊取	古墳・奈良	55	藤谷横ヶ谷遺跡	竊取跡	
23	戸津村1号遺跡	竊取・製鉄跡	奈良	56	上荒原藤谷口遺跡	竊取跡	
24	戸津村2号遺跡	製鉄跡	平安～室町	57	上荒原跡1号2遺跡	竊取跡	
25	戸津2号墓	塚跡	平安	58	上荒原跡3号2遺跡	竊取跡	鎌倉
26	戸津跡1号遺跡	竊取・製鉄跡	平安	59	上荒原跡4号2遺跡	竊取・製鉄跡	平安・中世
27	戸津跡2号製鉄跡	製鉄跡		60	馬場跡1号2遺跡	竊取・製鉄跡	平安
28	戸津八幡神社前遺跡	散布地	奈良～中世	61	馬場跡2号2遺跡	製鉄跡	
29	戸津本遺跡	寺院跡	室町	62	藤谷宮跡群	竊取	奈良～中世
30	湯上ヶ丘1号古墳群 (湯上谷古墳群)	竊取・製鉄跡	鎌倉				
31	上荒原跡1号古墳群 (上荒原遺跡)	竊取	奈良				
32	上荒原跡2号2遺跡	竊取・製鉄跡	平安				

第1表 戸津シザワ遺跡と周辺の遺跡一覧

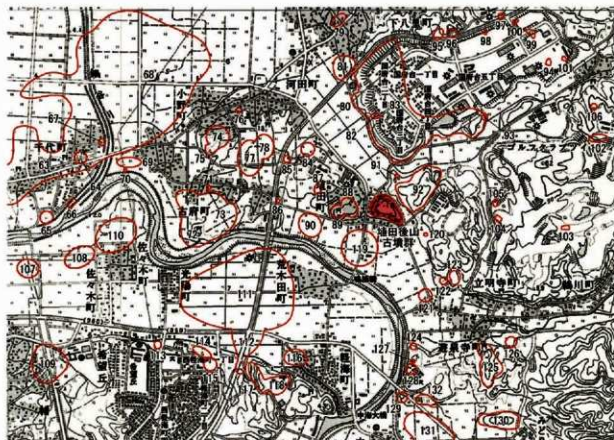
## 2. 東部丘陵の遺跡

縄文時代の遺跡には、湊上川右岸の河岸段丘上に中期後半から始まる複合集落遺跡の中海遺跡がある。また経海西芳寺遺跡(112)は、中期中葉から後葉にかけての集落遺跡である。その他、確認されているものには、宮谷寺屋敷遺跡(88)、南野台遺跡(73)、遊泉寺遺跡(124)、上八里A遺跡、河田向山下遺跡などがある。

弥生時代の遺跡は、梯川中下流域左岸の沖積平野に見られる。中期は、「小松式土器」の標識遺跡である八日市地方遺跡が下流に見られるのが多くない。後期後半になると中流域で遺跡数が増加してきてくる。主なものでは漆町遺跡、白江梯川遺跡、吉竹遺跡、佐々木ノテウラ遺跡(108)、佐々木アサバタケ遺跡(110)などがある。これらの遺跡のほとんどは弥生時代から中・近世に至る複合集落遺跡である。

上述の集落遺跡は、古墳時代前期には他地域の土器群の流入とともに飛躍的な発展を遂げている。ほかにも、荒木田遺跡(111)、亀山玉造遺跡(115)、小野町遺跡(67)、千代本村遺跡(65)が存在するようになる。同時期、梯川をやや遡り、流域の集落を見渡すことのできる丘陵縁辺部には河田山古墳群(83)、それより150m南で、埴田後山古墳群と隣接する地に埴田山古墳群(92)が存在する。また、梯川と湊上川の合流地点付近にはブッシュウジヤマ古墳群(129)、梯川をやや下った南側丘陵裾には八幡古墳群(109)が周知されている。さらに河田山古墳群と鍋谷川を挟んで向側山裾には河田山古墳群が存在し、7基が確認されている。河田山古墳群は、産業振興団地造成工事に伴う発掘調査を昭和61・62年に渡り実施し、前中期の古墳及び切石積横穴式石室を主体部にもつ終末期古墳の計62基を確認している。

この河田山古墳群に加え、後期群集墳の埴田後山古墳群が存在することで、丘陵縁辺部での古墳



第4図 埴田後山古墳群と周辺の遺跡 (S=1/25,000)

No.	遺跡名称	種別	時代	No.	遺跡名称	種別	時代
63	埴田後山古墳群	古墳	古墳	98	穴場横穴	横穴墓	
64	千代村杉ノ道跡	海防跡	古墳～中世	99	上八里横穴墓	横穴墓	
65	千代村道跡	堤防	鎌倉	100	上八里C道跡	敷布地	奈良
66	種地遺跡	敷布地	古墳	101	上八里B道跡	敷布地	
67	千代小野町道跡(小野町道跡)	敷布地	古墳	102	黒川B道跡	敷布地	鎌文
68	古野しのまる道跡	高塚跡	古墳～平安	103	黒川C道跡	寺院跡	平安
69	古野道跡	高塚跡	平安	104	黒川D道跡	寺院跡	平安
70	古野ツノノ道跡	横溝(溝藏)	鎌倉	105	黒川E道跡	敷布地	平安
71	古野横穴	横穴墓	平安・中世	106	黒川G道跡	敷布地	平安
72	古野ノ道跡	敷布地	平安・中世	107	佐々木道跡	高塚跡	平安
73	南野台道跡	敷布地	鎌文・古墳	108	佐々木ノ門ノ道跡	高塚跡	新生～中世
74	十九堂山道跡	寺院跡	平安・中世	109	八幡道跡・八幡古墳群	高塚跡・古墳	鎌文～近世
75	十九堂山中世墓群	墳墓	中世	110	佐々木ツノノ道跡	高塚跡	新生～中世
76	小野古塚跡	墳墓	近世	111	寛木田道跡	高塚跡	古墳～中世
77	小野道跡	敷布地	平安	112	経海西芳寺道跡	高塚跡	鎌文・中世
78	小野ツノノ道跡	敷布地	平安・中世	113	大谷口道跡	敷布地	古墳
80	河田B道跡	敷布地	奈良	114	経海道跡	敷布地	新生～近世
81	河田C道跡	敷布地	古墳	115	黒山玉道跡	高塚跡	古墳
82	河田横穴	横穴		116	西芳寺道跡	寺院跡	平安・中世
83	河田山道跡・河田山古墳群	集落跡・古墳	旧石器 奈良・古墳	117	経海中世墓群	墳墓	平安
84	埴田ツノノ道跡	敷布地		118	経海南寺	寺院跡	平安
85	新田利常公院塚	塚	近世	119	埴田道跡	敷布地	奈良・平安
86	埴田の倉庫	史跡(倉庫)	近世	120	埴田塚	塚	中世
87	埴田ツノノ道跡	敷布地		121	瀧泉寺・埴ノA道跡	敷布地	平安～中世
88	宮谷寺屋敷道跡	敷布地	鎌文・室町	122	瀧泉寺・埴ノB道跡	敷布地	平安～中世
89	埴田ツノノ道跡	敷布地	古墳	123	隆明寺跡	寺院跡	平安初期
90	埴田ツノノ道跡	敷布地	平安・中世	124	瀧泉寺道跡	敷布地	鎌文
91	埴田塚所古墳	古墳(南平?)	古墳	125	窪の里1～3号塚	墳墓	平安～鎌倉
92	埴田山古墳群	古墳	古墳	126	瀧泉寺跡	寺院跡	平安初期
93	河田山古墳群	古墳	古墳	127	仏生寺道跡	経路(溝藏)	中世
94	上八里1号墓	墳墓	古墳	128	仏生寺跡	寺院跡(溝藏)	中世
95	上八里A横穴墓	地下式墳	中世	129	ツノノツノノ行古墳群	古墳	古墳
96	上八里B横穴墓	横穴墓	中世	130	長寛寺中世墓群	墳墓	室町
97	上八里C横穴	横穴墓	中世	131	中谷B道跡	海防跡(高塚跡?)	古墳～中世
				132	中谷C道跡	敷布地	平安～中世

第2表 埴田後山古墳群と周辺の遺跡一覧



の築造が古墳時代各期にわたりほぼ継続的になされていると見なすことが出来る。にも関わらず、6世紀代（古墳時代後期）に入ると流域の各遺跡からは遺物、遺構とも急激な減少を見せる。この状況は、7・8世紀にも大きな変化はなく、現在のところ深町遺跡の一部と佐々木ノテウラ遺跡、中海遺跡、白江梯川遺跡、古府遺跡（69）から遺物等がごく僅かに確認されるにとどまる。

奈良時代には、埴田遺跡（119）、上八里B遺跡などが新たに出現するが、遺跡の数・規模は減少・縮小したままであり、周辺が再び活況を取りもどすのは平安時代の中頃になってからである。平安時代には、埴田ウラムキ遺跡（90）、遊泉寺クボタA・B遺跡（121・122）が確認でき、先述の中流域複合集落跡においても掘立柱建物をはじめ、遺構や遺物が急増してくる。また、西側の古府台地上では十九堂山遺跡（74）から布目瓦が、古府遺跡から10世紀中葉の軒平瓦がそれぞれ出土しており、当地が加賀国府の所在地として有力視されているが、周辺一帯における調査面積が少なく、確証は発見されていない。



第5図 薬師遺跡と周辺の遺跡 (S=1/25,000)

No.	遺跡名称	種別	時代	No.	遺跡名称	種別	時代
	薬師遺跡	敷布地	奈良～平安	147	矢崎B古墳	古墳(清滅)	古墳
133	白米1・2号瓦葺跡	瓦葺跡	近世前期	148	石山古墳	古墳(清滅)	古墳
134	藤古高跡	遺跡(清滅)	近世前期	149	矢崎宮の下遺跡	高塚跡	縄文～中世
135	藤わ/PTA遺跡	敷布地	奈良	150	狩津A遺跡	敷布地	縄文
136	藤わ/PTB遺跡	敷布地	古墳	151	狩津B遺跡	敷布地	縄文
137	御幸塚城跡	城跡	室町	152	池田城跡	城跡	
138	御幸塚古墳	古墳 史跡指定地	古墳	153	本場古墳	古墳(清滅)	古墳
139	五郎塚貝塚	貝塚(清滅)	縄文	154	本場B遺跡	敷布地	平安・中世
140	今江穴六跡	堀穴基(清滅)	縄文	155	本場C遺跡	敷布地	弥生
141	今江五丁目遺跡	高塚跡	縄文・古代	156	三谷遺跡	敷布地	縄文
142	土音遺跡(前河遺跡)	敷布地	縄文	157	三谷B遺跡	敷布地	弥生～古墳
143	土音遺跡(奥河遺跡)	古墳	古墳	158	三谷村・谷遺跡	不詳	
144	福山跡	高塚跡	古代	159	本場遺跡	敷布地	縄文
145	福山古墳(原堤)	古墳(墳丘削平)	古墳	160	狩津C遺跡	高塚跡	縄文
146	今江四丁目遺跡	高塚跡	弥生	161	藤わ/PTC遺跡	敷布地	古墳

第3表 薬師遺跡と周辺の遺跡一覧

中世においては、前出の複合集落から多数の井戸跡や中世陶磁器などが検出されるとともに、仏生寺跡(128)、輕海中世墓群(117)、西芳寺遺跡(116)、十九堂山中世墓群(75)、長寛寺中世墓跡(130)などが確認されている。

近世における考古資料としては、小野古窯跡(76)が周知されている。

### 3. 月津台地の遺跡

月津台地上に遺跡が出現するのは、旧石器時代終末期から縄文時代草創期である。実態は不明であるが、額見町遺跡、念仏林南遺跡、念仏林遺跡で当該期の石器が出土している。縄文時代前期には集落の展開が見られるようになる。この頃の加賀三湖は入江の状態であったと考えられており、大谷山貝塚、柴山水底貝塚など、貝塚を伴う集落が入り江に面して営まれている。その後、縄文時代中期には五郎座貝塚(139)、今江五丁目遺跡(141)、矢崎宮の下遺跡(149)、符津A遺跡(150)、符津B遺跡(151)、念仏林遺跡、念仏林南遺跡、額見町遺跡など多くの集落が営まれる。しかし、これらの集落は縄文時代後期には姿を消してゆく。

次に集落の展開がみられるのは弥生時代後期から古墳時代中期で、額見町西遺跡、念仏林南遺跡、島遺跡などで断続的に集落が営まれる。しかし、これらの集落も古墳時代中期には姿を消し、古墳時代後期には月津台地は墓域となる。

月津台地では、5世紀末から約100年間、多数の古墳が築造される。これらの古墳は「三湖台古墳群」と総称されており、江沼勢力の墓域が移動してきたものと考えられている。台地北東部には矢崎B古墳(147)、御幸塚古墳(138)、土百古墳(143)、狐山古墳(145)、台地西部には臼のほぞ古墳、左門殿古墳、茶白山古墳、柴山湯に通ずる馬渡川の開析谷周囲には念仏林古墳、念仏塚古墳、石山古墳(148)、箕輪塚古墳、矢田野エジリ古墳、矢田借屋古墳群、矢田野古墳群、百人塚古墳、中村古墳(2)、狐森塚古墳、矢田新丸山古墳が分布する。

6世紀末から7世紀初頭、三湖台古墳群の終焉と同時に月津台地上に集落が出現する。これらの遺跡からは、須恵器生産に伴う窯道具や鍛冶関連遺物などが出土しており、丘陵地での製陶・製鉄に関わる手工業生産関連の集落と考えられる。また、額見町遺跡、額見町西遺跡、矢田野遺跡、薬師遺跡ではL字型カマドを伴う堅穴建物が確認されており、渡来系移民の集落としての性格も窺える。当時の月津台地は越前国江沼郡に含まれていたが、弘仁14年(823年)の加賀立国に伴う能美・江沼の分郡時には月津台地の半ばが境界となったようである。月津台地の古代集落は、7世紀後半を最盛期としその後も継続するが、9世紀後半以降衰退し、10世紀には終焉をむかえる。

額見町遺跡、念仏林南遺跡、刀何理遺跡、薬師遺跡などでは11・12世紀の集落も見られるが、13世紀以降、月津台地上の集落遺跡は姿を消す。農業経営に不向きな台地上から、平野部へ移動したものと考えられる。

#### 引用・参考文献

- 小松市教育委員会 1989 『後山無常堂古墳・後山明神3号墳』
- 小松市教育委員会 1996 『念仏林南遺跡Ⅱ』
- 小松市教育委員会 1999 『林タカヤマ窯跡』
- 小松市教育委員会 2006 『額見町遺跡Ⅰ』

## 第Ⅱ章 戸津シンプザワ遺跡発掘調査

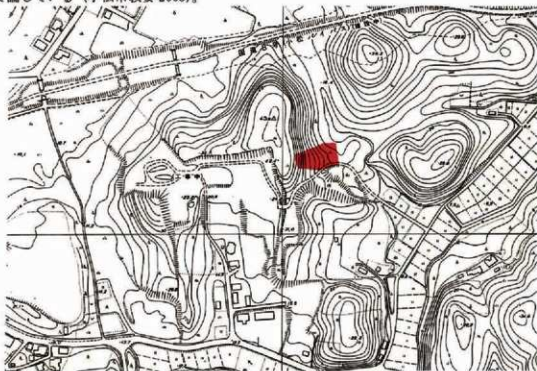
### 第1節 調査の概要

#### 1. 調査に至る経緯

戸津シンプザワ遺跡は戸津町・林町の西側に位置し、一般国道8号バイパスの南約100mの地点に存在する。このバイパスの開設に伴い、周辺の低丘陵では土砂採取事業等が盛んに行われており、今回調査を行った製鉄炉跡についても、平成2年の土採取事業を原因としてその存在が明らかとなったものである。一部削平されたまま今日まで調査は行われず、そのままの状態では放置されてきたが、近年製鉄炉跡の崩壊・流出が懸念されるようになったことから、現状を記録保存することを目的として平成11年度国庫補助事業により、約1,125㎡を対象として、うち遺構確認部分である約400㎡の調査を実施した。

#### 2. 既往の調査

戸津シンプザワ遺跡は、通称シンプザワ（神舞沢）とされる小谷を中心に展開する、製鉄・製陶を含めた生産遺跡である。本遺跡に関わる調査の初見は1974（昭和49）年で、石川県古窯跡調査事業五ヵ年計画の第4年次事業として「戸津5号窯跡」の発掘調査が行われており、この調査において、3基の須恵器窯（5・6・7号窯）の存在が明らかとなった（石川県教委他1975）。次いで小松市教育委員会により昭和52～53年度にかけて実施された南加賀古窯跡群詳細分布調査事業では、さらに2ヶ所の製鉄跡（1・2号製鉄跡）及び1基の須恵器窯（12号窯）が新たに確認されている（小松市教委1979）。近間強氏は昭和60～62年度にかけて小松丘陵窯業遺跡分布調査を行い、従前の調査成果を踏まえながら、これらの須恵器窯・製鉄跡一つの単位支群（「戸津シンプザワ単位支群」）と積極的に位置付けた（小松高他1988）。その後も1990（平成2）年に今回報告の端緒となる土砂採取事業に伴い製鉄跡が確認されている。近年では、望月精司氏がより詳細な検討を加え、戸津シンプザワ支群をさらに4つにグルーピングし、当支群を含む戸津地区全体の製鉄遺跡分布について論じている（小松市教委2003）。



第6図 戸津シンプザワ遺跡 調査区位置図 (S=1/5,000)

### 3. 調査の経過

#### (1) 調査方法

調査区内にはススキが数年に亘って生い茂り、背丈以上のマツも生えていた。よって調査対象区域をやや広めに設定し、ススキ等を刈り取った後、斜面上方からの流出堆積土を人力で取り除き、製鉄炉の検出及び排滓場の範囲確認作業を行った。

調査区全体を対象として任意に5m×5mのグリッドを設定(第7図)した後は、グリッド毎の出土遺物の取り上げを行う。

製鉄炉及び排滓場については、それぞれ土層断面図の作成及び土層断面の写真撮影を行っている。遺構完掘後は、高所より完掘写真を撮影し、平板測量により排滓場の1/20縮尺の平面図を作成。また調査区域全体を対象として1/100縮尺の地形測量図を作成した。

#### (2) 発掘作業の経過

平成11(1999)年

10月19日(火) 晴のち曇 本日より戸津シンブザワ遺跡の調査を開始する。調査開始前の現状写真撮影。1号製鉄炉及び排滓場を確認。

10月25日(月) 晴 調査用の機材を仮設建物へ搬入する。

11月2日(火) 曇のち晴 三角点(H=43.81m)より、調査区内へレベルを移動する。

11月4日(木) 曇一時雨 グリッド杭打ち作業、調査区精査作業開始。

11月22日(月) 晴 大澤正己(九州テクノリサーチ)氏・穴澤義功(たたら研究会)氏、来跡。

12月9日(木) 曇のち雨 排滓場土層堆積状況写真撮影。

12月10日(金) 排滓場土層堆積状況図作成。

12月22日(水) 曇一時雪 調査区に約30cmの積雪、本年の現場作業終了を決める。

平成12(2000)年

1月5日(水) 曇時々晴 排滓場北側斜面の掘り下げ作業。

1月8日(土) 曇時々雨 排滓場の土層堆積状況図作成。

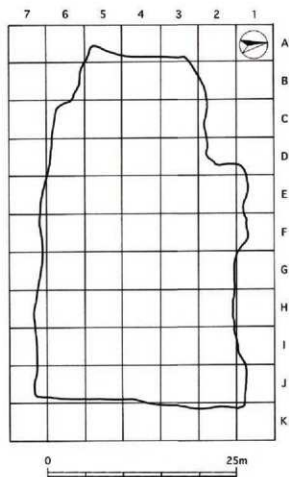
1月12日(水) 曇 1号製鉄炉平面図及び断面図作成。調査区全域の地形測量開始。

1月18日(火) 曇 排滓場完掘、平面図作成開始。1号製鉄炉写真撮影。以後、出土遺物の整理作業のため、3月まで一時現場作業を中断。

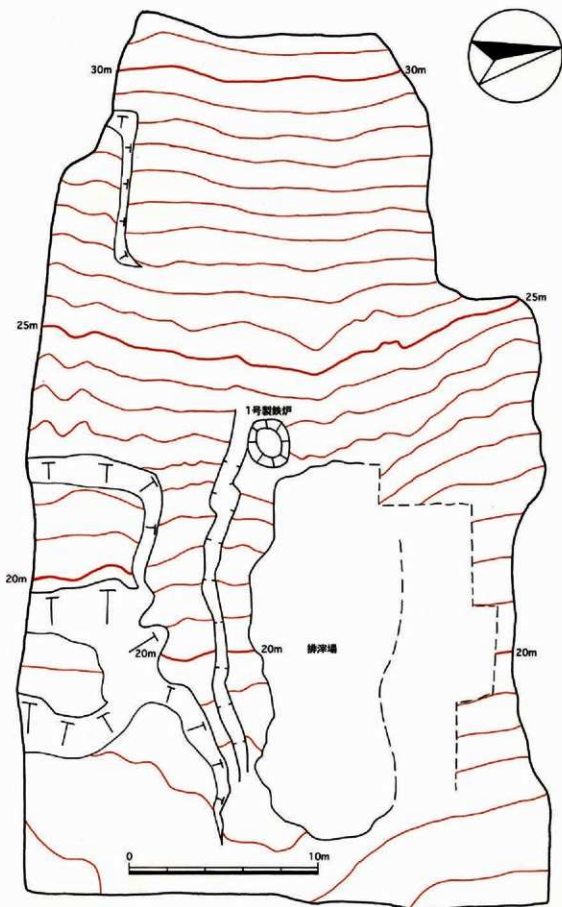
3月22日(水) 曇のち晴 完掘状況写真撮影、本日にて現地における調査終了。

#### (3) 整理等作業の経過

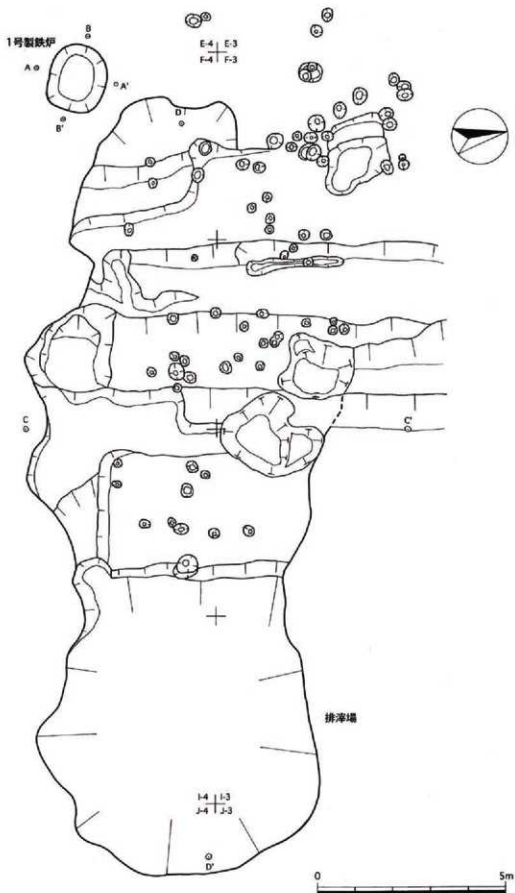
発掘調査で出土した鉄滓については、発掘調査期間中の平成12年2月より同年3月上旬に至るまで、洗浄・乾燥作業を実施し保管を行っている。また平成19年度国庫補助事業において出土品整理作業、及び報告書刊行を行った。



第7図 戸津シンブザワ遺跡 調査区分割図(S=1/500)



第8図 戸津シンプザワ遺跡 調査区地形測量図 (S=1/200)



第9図 戸津シンプザ遺跡 調査区平面図 (S=1/100)

## 第2節 調査の成果

### 1. 遺構

#### (1) 1号製鉄炉

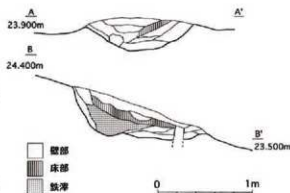
E-4~F-4Grにて検出されたもので、長径140cm以上・短径115cm以上、深さ35~45cmを測り、東西方向に長辺をもつ。

本来は本遺構の上面に円筒形の炉体が築かれ、堅型炉を構成していたものと思われるが、その残存状況は良好でなく、掘り下げ約10cm以内で炉床に到達した。このことから、製鉄炉の炉底部分に相当する地下施設坑と考えられる。また、炉床を掘り抜いてみると炉壁の下底部に堆積した鉄滓10点が確認された。なお排滓場への注ぎ口や送風施設等については、既に削平されていることも判明した。

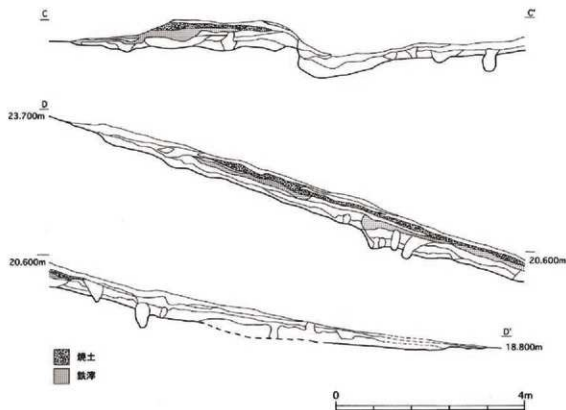
#### (2) 排滓場

排滓場の範囲は長軸20m以上・短軸8.5m以上、深さ60cm前後に及ぶもので、崩壊・流出等によりすでに失われた製鉄炉に関連するものとの推定も可能であるが、その位置関係から1号製鉄炉に伴う排滓場の蓋然性が高い。

地形測量においても斜面の盛り上がり認められ、グリッド毎の鉄滓出土量ではG-3Grが群を抜いて多く、以下H-3Gr、G-2Grと続く。土層断面の観察では、焼土や鉄滓の堆積層を確認している。排滓場堆積層の全体的な様相としては、上・中層は大小ばらつきがある鉄滓を中心に堆積し、下層は地形的に斜面上方からの流出土に混入して鉄滓が認められた。しかし、製鉄の操業状況やその回数把握することはできなかった。



第10図 戸津シンブザワ遺跡 1号製鉄炉土層断面図 (S=1/40)



第11図 戸津シンブザワ遺跡 排滓場土層断面図 (S=1/80)

## 2. 遺物

(1) 製鉄関連遺物 (第12図、第13図10・11)

製鉄関連遺物は、遺物箱 (555×395×142 mm) で105箱分の量を得ることができた。しかし全ての出土遺物を持ち帰ることはできなかったので、本遺跡の総出土量はそれ以上に上る。

大別すると1号製鉄炉からのものと、排滓場からの出土のものに分けられるが、1号製鉄炉からは出土量2箱に対し、排滓場からは103箱と、圧倒的に排滓場からの出土が多い。また排滓場出土の遺物の内、グリッド別に把握できたもの81箱分の出土分布の傾向をつかむため遺物箱単位で示したのが第4表であるが、G-36rを頂点として、その濃淡が明瞭となった。出土量と報告書の紙幅の関係から、図化掲載し得たものは限られるが、以下の製鉄関連遺物が出土している。

	5	4	3	2	1	
E						
F				1		
G		1	48	7		
H			18	4		
I		1	3			
J						

(単位:箱、1箱未満は )

第4表 戸津シンブザウ遺跡 グリッド別遺物出土状況

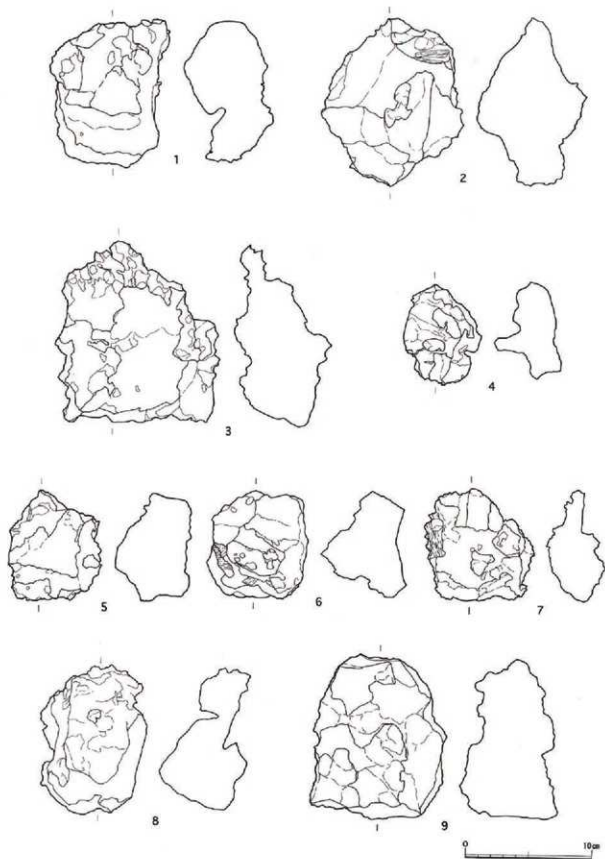
1～3は1号製鉄炉出土の炉内滓である。1は下面上手に向かって塊状に突出し略長方形を呈するもので、上面下手側に幅約2cmの工具痕が認められる。2は菱形状で厚みがあり、下面右側部に向かって著しい突起をもつ。また下面下手端部には褐灰色の炉壁土が付着している。3は重量が1000gを超える大型のもので、不整五角形状を成し、上面が比較的平面形であるのに対し、下面は隆起している。上手側から右側部にかけて気孔が目立ち、下面左側部から下手側にかけて赤灰色の炉壁土が付着している。

4～11は排滓場出土のもので、4～8の炉外流出滓、9～11の炉壁がある。

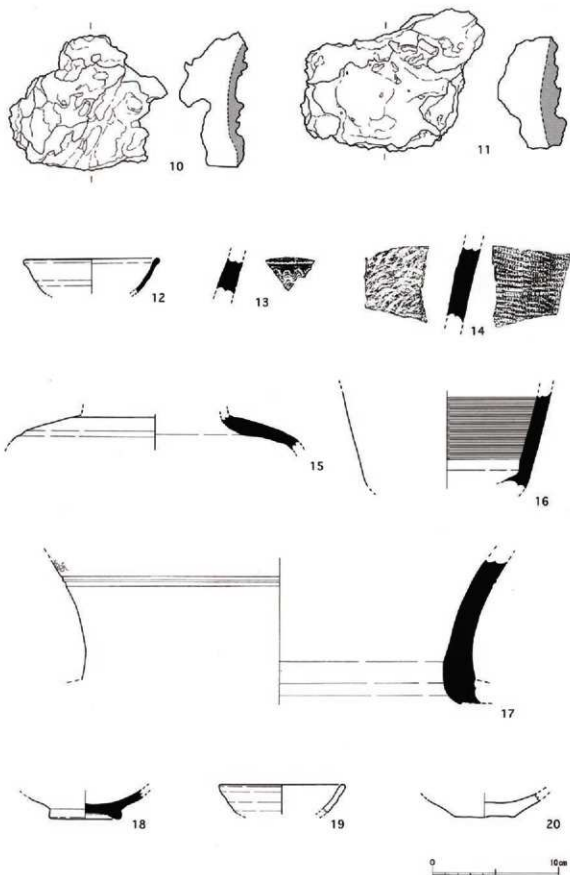
4は小型のもので、上面右側部及び下面右側部の破面が著しく、その一部は黒色ガラス化して光沢をもつ。基本的に黒褐色を呈しているが、上面上手から下面全体にかけては紫紅色を帯びており、全体的に不整な窪みと隆起が目立っている。5は不整六角形を呈し、小型であるが厚みをもつもので、上手側と左側部に平面をもっている。6は略正方形で、平坦できれいな下面に対し、瘤状に突出した上面をもつ。上面の瘤状隆起の突端は気孔の目立つ破面を成し、その隆起から下手に向かい、木炭痕が多く点在している。7は左側部と下手側に平面をもち、不整五角形を呈するもので、下面左側部に大きな破面が見られる。上面から下面右側部にかけての細かい突起が顕著で、上面上手に1ヶ所、下面上手に2ヶ所、幅約1cmの工具痕が明瞭に残る。8は不整長楕円形で、右側部に平面をもつ。上面下手側は大きく隆起し、下面は平坦である。下面中央付近に、幅約1.5cmの工具痕が認められる。

9は下面に平坦部をつくっており、炉体下段付近のものと考えられるもので、左側部は直線状、上面から右側部にかけては弧状を描いている。内面は下手側に向かって厚みを増し、裏面は炉壁由来と思われる赤褐色砂質土が全面に薄く残っている。10も下面に平坦部をつくり、炉体下段付近に位置したのもと考えられるもので、裏面左側部は炉壁の一部が突出している。内面は黒褐色～紫紅色で、中央から下手側にかけて大きく凹部を成しているため、下面の形状は「く」の字を呈している。裏面は約1cm前後の厚さで黄褐色炉壁土が付着している。11は上手右側部が大きく突起するもので、破面の観察から炉体中段付近のものと考えられる。内面中央から左側部にかけて緩やかな膨らみをもち、上手端部と下手端部にそれぞれ黒色ガラス化した光沢が見られる。裏面は約1.5～2cm前後の厚さで黄褐色炉壁土が付着しているが、不定方向のひび割れが無数に生じている。





第 12 図 戸津シンbazawa遺跡 出土遺物実測図 1 (S=1/3)



第13図 戸津シンブザワ遺跡 出土遺物実測図2 (S=1/3)

## (2) 土器 (第13図 12~20)

今回の発掘調査では僅かであったが、土器片の出土も見られた。総点数は21点で、全て排滓場からの出土である。

その内、図化し得た9点を掲載した。12~18が須恵器、19・20が土師器である。

12は埴の口縁部破片で、器内は薄く器形は緩やかに内湾し、口縁端部は外面に向かって肥厚する。外面には沈線を施している。13・14・17は甕で、13は外面に沈線を巡らせ櫛描波状文を施したもので、頸部破片と考えられる。14は内外面にタタキ目を施したもので、体部破片であろう。17は頸部破片で、外面上端に2本の沈線と波状文を、内面下端にはタタキ目を施している。外面施文や胎土の観察から、13と同時期に属するものと判断できる。15は壺の肩部破片で、焼成が甘く生焼けである。16は瓶の底部破片で、胴部へ向かって直立気味に外傾する立ち上がりをもつ。内面にはカキ目調整を施している。18は埴の底部破片で、高台を付している。

19は埴の口縁部破片で、口縁は丸く収まりながら端部で僅かに面をつくる。20は皿の底部破片で、底部外面に糸切り痕を残している。

## 第3節 小結

製鉄遺跡の操業時期を比定する上では、当然ながら製鉄炉から得られる情報が果たす役割は大きなものがある。しかし、今回の調査では1号製鉄炉が検出されたが、その大半が失われていたため、本遺跡の操業時期に言及することは困難を極めた。それでも敢えて提示するならば、1号製鉄炉の直下に広がる排滓場出土土器の検出や周辺遺跡との関連から、概ね10世紀前半頃という年代を付与することができる。しかしながら出土土器そのものが僅少破片であることや、一部に8世紀前半の須恵器片が含まれていることなどから、その根拠の乏しきは否めない。従ってこの時期は推定の域を出ないことも付言しておきたい。

今回の調査からは戸津シンブザロ遺跡の、生産量や操業回数など製鉄遺跡としての操業規模を解明するまでには至らなかった。しかし今後、南加賀製鉄遺跡群を評価していく上で、本遺跡が有する情報を報告し得たことは、従来本市において同様な製鉄遺跡調査事例が必ずしも多くない中において、重要な意義をもつものと思われる。

## 引用・参考文献

- 石川県教育委員会・戸津古窯跡調査委員会、1975：『小松市戸津5号窯』  
石川県埋蔵文化財保存協会、1993：『小松市林遺跡』  
小松高等学校地歴部・近岡強、1988：『小松丘陵窯跡群分布調査報告Ⅰ（遺跡編）』『石川考古学研究会々誌』  
第31号 石川考古学研究会  
小松市教育委員会、1979：『南加賀古窯跡群詳細分布調査事業報告書』  
小松市教育委員会、1999：『林タカヤマ窯跡』  
小松市教育委員会、2003：『林製鉄遺跡』  
小松市教育委員会、2006：『幸町遺跡Ⅱ』  
(財)石川県埋蔵文化財センター、2000：『富来町給分クイナ谷製鉄遺跡』  
(社)日本鉄鋼協会社会鉄鋼工学会編、2005：『鉄関連遺物の分析評価に関する研究会報告』

第5表 戸津シンプザワ遺跡 製鉄関連遺物観察表

図版	番号	出土地点	種類	計測値(cm)			重量(g)	色調	備考
				長径	短径	厚さ			
12	1	1号製鉄炉 覆土	炉内滓	8.7	11.5	6.6	658.7	表:黒褐色 地:黒褐色～茶褐色	幅約2cmの工具痕あり
12	2	1号製鉄炉 覆土	炉内滓	11.3	13.4	8.6	857.7	表:黒褐色 地:黒褐色～茶褐色	炉壁土付着、木炭痕あり
12	3	1号製鉄炉 覆土	炉内滓	12.8	14.5	7.4	1223.3	表:黒褐色 地:黒褐色	炉壁土付着
12	4	H-3Gr 排滓場	炉外流出滓	6.3	7.9	4.7	150.8	表:黒褐色 地:黒褐色	
12	5	I-4Gr 排滓場	炉外流出滓	7.4	8.7	5.6	382.0	表:黒褐色 地:黒褐色	
12	6	F-2Gr 排滓場	炉外流出滓	7.6	8.4	6.2	555.4	表:明褐色 地:明褐色	木炭痕あり
12	7	H-3Gr 排滓場	炉外流出滓	8.6	8.9	4.2	285.3	表:茶褐色 地:茶褐色	幅約1cmの工具痕あり
12	8	G-3Gr 排滓場	炉外流出滓	8.4	11.8	6.8	529.3	表:灰褐色 地:灰褐色	幅約1.5cmの工具痕あり
12	9	I-4Gr 排滓場	炉壁	10.5	12.9	7.4	907.8	表:赤褐色 地:赤褐色	炉体下段付近、酸化炉壁土付着
13	10	F-2Gr 排滓場	炉壁	11.3	10.6	5.0	528.6	表:黒褐色～紫紅色 地:黄褐色	炉体下段付近、炉壁土付着
13	11	G-3Gr 排滓場	炉壁	13.0	10.5	5.0	586.1	表:黒褐色 地:黄褐色	炉体中段付近、炉壁土付着

第6表 戸津シンプザワ遺跡 土器観察表

図版	番号	出土地点	分類1	分類2	名称	法量(cm)	胎土	焼成	色調	調整	備考
13	12	G-2Gr 排滓場	須志器	食膳具	碗	口径10.8 残存高2.8	密	良好	灰		口縁部破片
13	13	G-3Gr 排滓場	須志器	貯蔵具	甕		密	良好	浅黄		頸部破片
13	14	H-1Gr 排滓場	須志器	貯蔵具	甕		緻密	堅緻	黄灰	内外面タタキ	体部破片
13	15	J-3Gr 排滓場	須志器	貯蔵具	壺	残存高2.8	密	不良	浅黄		肩部破片
13	16	G-3Gr 排滓場	須志器	貯蔵具	瓶	残存高7.8	緻密	良好	灰	内面ウキメ	底部破片
13	17	G-3Gr 排滓場	須志器	貯蔵具	甕	頸径31.0 残存高11.7	密	堅緻	浅黄	内面タタキ	頸部破片
13	18	G-2Gr 排滓場	須志器	食膳具	碗	高台径5.7 見込み高0.5 残存高2.3		不良	灰白	磨耗顕著	底部破片
13	19	G-3Gr 排滓場	土師器	食膳具	碗	口径10.0 残存高2.4		良好	にぶい黄澄		口縁部破片
13	20	G-2Gr 排滓場	土師器	食膳具	皿	底径8.4 残存高1.9		良好	にぶい黄澄	底部糸切り痕	底部破片

## 第三章 埴田後山明神4号墳発掘調査

### 第1節 調査の概要

#### 1. 調査に至る経緯

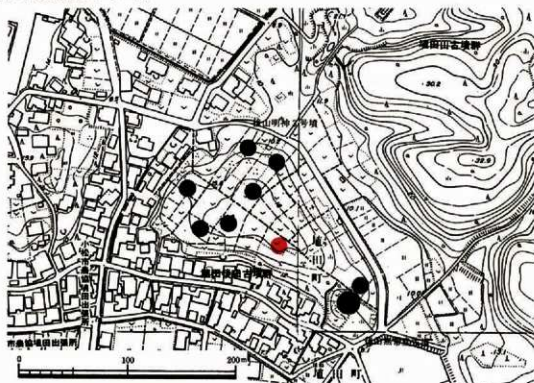
埴田後山明神4号墳は埴田町城内の低丘陵上に展開している、埴田後山古墳群を構成する古墳である。今回、地主の東孫一氏が畑を耕作中に、鉄刀・鉄鎌・鉄斧を発見し、埋蔵文化財調査室へ通報された。それを受けて急速、平成12年度国庫補助事業により残存状況および古墳規模の確認作業を目的として、緊急に調査を実施した。

#### 2. 既往の調査

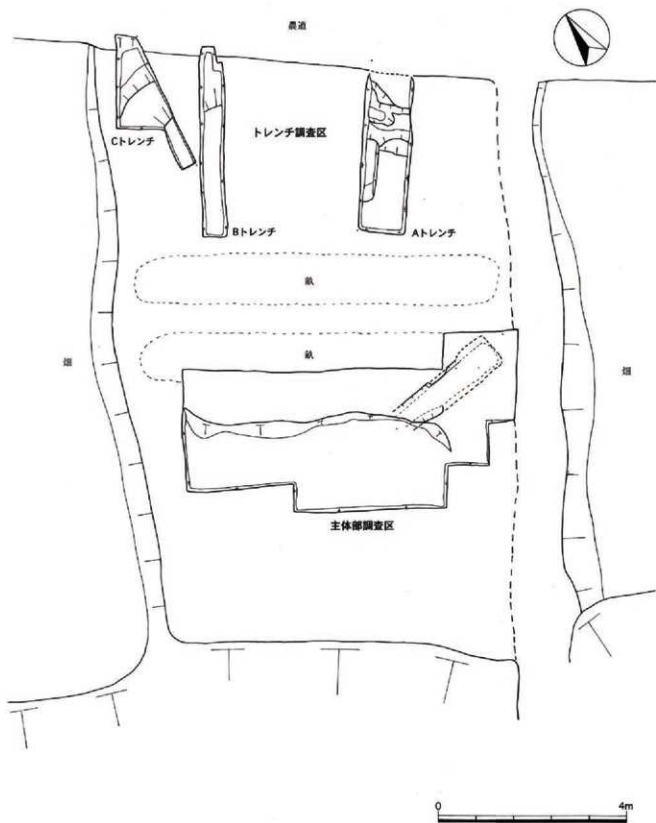
埴田後山古墳群に関しては、既刊の報告書（小松市教委 1989a, b）に詳しいため、その記述に拠ってこれまでの調査を概観したい。

埴田後山古墳群の発見に関する記録は古く、昭和以前には「地下六尺（約2m）ばかりの所から大形の石棺を掘り出した」（国府村史編纂委 1956）と伝えられている。その後1952（昭和27）年には埴田後山明神1号墳から提瓶、直刀、高坏、壺が、1954（昭和29）年には埴田後山明神2号墳から環鈴、直刀、甲冑などが出土している。1982（昭和57）年には土砂採取工事での発見により、埴田後山無常堂古墳の発掘調査が行われ、「南加賀型木芯粘土室」（以下「粘土室」と呼称）を含む2つの主体部を検出し、銅製四獣鏡、メノウ製勾玉、櫛、鉄製鎧甲、鉄剣、鉄鎌が出土した。また1987（昭和62）年には今回の調査に至る経緯と同様、地主が畑の耕作中に須恵器と玉類を発見したことを契機として埴田後山明神3号墳が発掘調査され、粘土室の主体部とともに多量の土器、管玉、ガラス製小玉、刀子、鉄鎌が出土している。「埴田後山古墳群」の名称は、これら埴田後山明神1号墳及び2号墳、埴田後山無常堂古墳、埴田後山明神4号墳の総称として、新たに付したものである。

また1988（昭和63）年に、埴田町周辺の丘陵地を対象として詳細分布調査を実施した結果、新たに3基の古墳を確認している。



第14図 埴田後山明神4号墳 位置図 (S=1/3,500)



第15図 埴田後山明神4号墳 調査区平面図 (S=1/80)

### 3. 発掘作業の経過

当該区域の調査については、開始時点で既に主体部の大部分が削平されていることが予測されていたことから、通常工程の表土除去などは行わず、開墾中に鉄刀が出土した部分について、僅かに残る耕作土の除去・精査、主体部の残存状況の確認を中心に行った。調査区域を対象として任意にグリッド設定を行い、調査を開始。主体部と想定される部分、トレンチによって確認した周溝について適宜、平面図及び土層断面図を作成した。なお各作業に応じて、作業状況及び確認遺構の写真撮影を行った。また調査終了後、地元埴田町を含め多くの方々に参加頂き、現地説明会を開催した。

## 第2節 調査の成果

### 1. 遺構と遺物

#### (1) 主体部調査区 (第15図、第16図)

畑の耕作中に鉄製品が出土したことから、地主への聞き取りを行い、その出土地点と思われる箇所(鉄製品が出土したであろう部分は目視で攪乱されていた)を含む調査区を設定。出土品が主体部の副葬品と考えられることから、「主体部調査区」と呼称した。

当初設定の主体部調査区は北西-南東を軸とした7m×3mの長方形の区画であったが、その後調査区の南西部は階段状に下がること、さらには地主が地山土を斜面下へ移動させたということが判明し、南側及び西側の調査区の一部については掘削を止め、全面の掘り下げを断念した。また東側の調査区隅部において散乱した白玉を検出したため、北東部の調査区を一部拡張している。以上のような経過により、調査終了時の主体部調査区画は凹凸あるものとなった。

#### 主体部の概要

すでに耕作等による攪乱の影響は著しく、主体部のほとんどは失われていた。しかし東側調査区隅部の白玉検出により、調査区を拡張した範囲を掘り下げた結果、白色粘土、赤褐色～櫻褐色粘土ブロックが分布する硬化面を確認した。最終的には長軸最大幅150cm、短軸最大幅34cmで、東西方向に長辺をもつ分布範囲を捉えることができた。またその周囲には割竹形木棺の痕跡と考えられる立ち上がりも断続的に認められたため、粘土の分布を棺床に由来するものと推定し、長軸230cm以上、短軸70cm以上となる、主体部範囲の復元(破線)を試みている。

また主体部範囲の西側において、長さ約30cmで、主体部長軸に平行して細長く伸びる「錆痕」が検出されている。そこには鉄製品、おそらくは鉄刀が副葬品として置かれていたものと推察される。

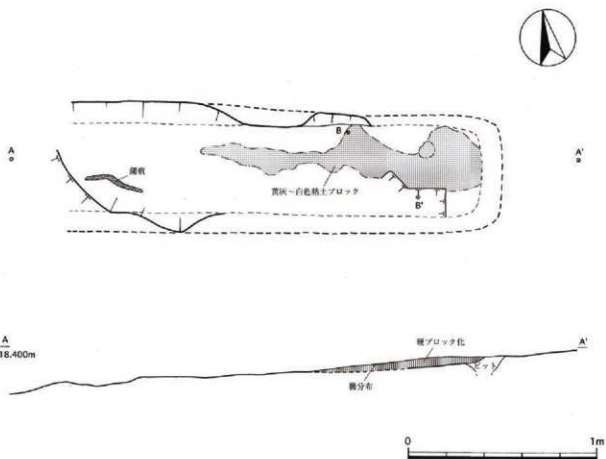
主体部範囲内からの出土遺物としては刀子、櫛、白玉が見られたが、刀子と櫛は重なりあって出土し、その時点で既に劣化、腐朽が激しかった。そこで樹脂を用いて固着させた後、周囲の土ごと取り上げたため、これらの遺物については出土状況図(第17図)を参照して頂きたい。また白玉の検出時は連珠状を呈しているものも確認されたが、付近の大部分はすでに攪乱を受けていたため、一括で取り上げを行ったものである。

#### 刀子 (第17図)

残存長約10cmで刀身の一部が欠損している。刀身の残存長は約4.5cmを測る。茎部は約5.5cmを測り、柄縁金具の残存も見られる。

#### 櫛 (第17図)

確認できたものは10点で、全て櫛の棟部片であり、歯は失われている。棟部の大きさは長さ、幅ともに2.5mm前後を測る中形品で、色調は黒色を呈している。また検出された棟部はほぼ北向きで、全体的に揃っている。



第 16 図 埴田後山明神 4 号墳 主体部実測図 (S=1/20)



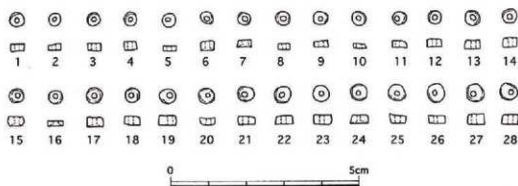
第 17 図 埴田後山明神 4 号墳 主体部遺物出土状況図 (S=1/4)



白玉 (第18図)

出土点数は完形品・略完形品(一部破損)を合わせて全345点を数えるが、それ以外にも破片少数を確認しており、埋葬時は上記の点数以上であったことが予想される。

345点の白玉については、直径・長さ・孔径・重量の各属性についての計測と孔面・側面の研磨状態の観察(篠原1995)を行っている。その全体を概観してみると、直径3.2~4.5(平均3.7)mm、長さ0.9~2.9(平均1.9)mm、孔径0.8~1.6(平均1.2)mm、重量0.01~0.10(平均0.05)gを測る。また観察できた全てのものについて、孔面は両面研磨を施し、側面は「長さ」軸に平行する擦痕方向の研磨がみられた。また石材は全て滑石製のものであった。別途第7表に、直径と長さの値にみられる点数の分布を示したが、正規分布とはならず、2つのピークをもつものとなった。出土時の分布状況との照合も行えなかったため、その理由を求めるのは困難であるが、興味深いデータである。なお実測図は、完形品より標準的な個体と判断されるものを任意に抽出し、図化したものを掲載している。



第18図 埴田後山明神4号墳 主体部調査区出土白玉実測図 (S=1/1)

個数	直径(mm)							総計
長さ(mm)	3.2-3.3	3.4-3.5	3.6-3.7	3.8-3.9	4.0-4.1	4.2-4.3	4.4-4.5	
0.8-0.9			1					1
1.0-1.1		3						3
1.2-1.3	3	2	4	1	2			12
1.4-1.5	4	14	11	4				33
1.6-1.7	7	16	19	7	1			50
1.8-1.9	10	18	15	7		1		68
2.0-2.1	12	20	18	3	9	6	3	93
2.2-2.3	2	17	14	7	5	11	4	60
2.4-2.5		2	1	3	6	2	2	16
2.6-2.7		2			1	1	2	6
2.8-2.9				1		2		3
総計	38	108	107	33	25	23	11	345

第7表 埴田後山明神4号墳 白玉の直径と長さの分布

## (2) 主体部調査区出土遺物 (第19図)

土師器、鉄製品が出土しているが、土師器は細片のみであった。また鉄製品は本調査前に地主の耕作中によって発見されたもので、元は主体部調査区からの出土である。その詳細な出土地点や状況は不明であるが、これらの遺物も副葬品として供されたものと考えられる。また器種の確定ができず報告し得なかったが、棒状の小破片や鉄片なども出土している。

### 鉄刀 (1・2)

1は残存長87.0cm、刀身の残存長72.3cmを測る鉄刀である。5点の破片を接合したものであるが、刀身は折れ曲がり、切先や茎が欠損するなど、その遺存状態は良好ではない。刀身は平造で、刀身幅は切先に向かい緩やかに狭めており、断面は長三角形を呈している。鬩は直角の片鬩と考えられるが、錆化により明瞭さに欠ける。茎は14.7cmを測り、茎幅は茎尻に向かい収束させており、その断面は長方形となる。また目釘孔の有無は不明である。なお刀身には鞘木と考えられる木質の付着が認められ、副葬時は鞘に納められていたことが推察される。

2は残存長95.1cm、刀身の残存長84.7cmを測る鉄刀である。刀身と鬩から茎にかけての一部が失われている。刀身は平造で滑らかな切先をもつ。内反りを呈すが、1と同様な遺存状態からの接合・復元を経ていることから、それが本来の形状を保持したものかは判断し難い。刀身幅は切先に向かい緩やかに狭まり、切先付近では刀身厚も薄くなる。また断面は長三角形を呈している。鬩は直角の片鬩と考えるが、欠損著しく、断定はできない。茎は破片のみで、断面は刀側に短軸をもつ台形となるが、茎全体の詳細を知ることが困難である。また茎破片に、目釘孔は認められない。刀身と茎に木質の痕跡を留めており、鞘と柄の装着が窺われる。

これら2本の鉄刀は、法量に顕著な差が認められない点や主体部の検出状況から総合して、埋葬遺体の両脇に、遺体と平行して配置されたものと思われる。

### 鉄鏃 (3~6)

鉄鏃は4点を図化(出土点数は18点接合資料を含め21点)したが、それ以外にも破片が多数出土しており、埋葬時の点数はそれ以上になるものと考えられる。

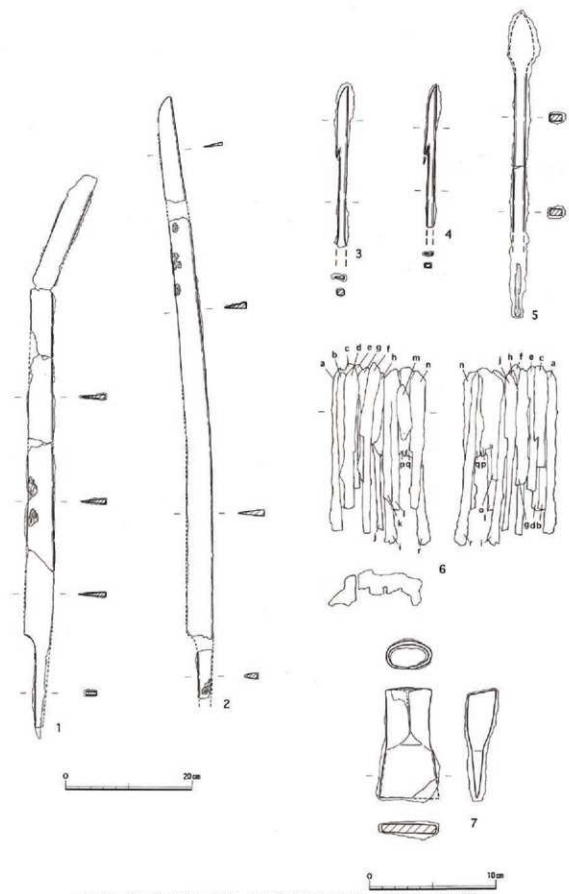
3・4・6は片刃長頸式のものである。3は残存長12.8cmを測り、茎部は欠損して不明だが、平面形が台形状となる鬩の一部を残している。4は残存長11.2cmを測り、鏃身の逆刺端部と頸部途中から茎部までを欠損しているもので、3に比べて鏃身幅が狭く、深い逆刺をもつ。

6は18点が錆蝕により接合したもので、錆化が著しく、片刃長頸式鏃であると確認できたが、詳細な形状までは観察し得なかった。全点とも切先の方向を同じくしていることから、副葬された時点ですでに鏃を揃え、束状にしていたものと思われる。

5は全長24.5cmを測り、ほぼ方形のものと考えられるが、鏃が厚く付着し、鏃身部及び茎部の詳細は不明である。3・4・6の片刃長頸式鏃と比較してその法量は大きく、これらとは異なる鏃であることがわかる。推定鏃身の形態の断定はできないが、柳葉長頸式と推察される。茎部には木質の痕跡が残る。

### 鉄斧 (7)

全長8.7cm、刃部長4.2cmを測る袋状鉄斧で、袋部の合わせ目と刃部に欠損が見られる。刃先は直刃で、刃部の幅は袋部に向かって狭くなりながら続いている。袋部側面は楕円形で、合わせ目は鉄斧中央付近で「ハ」の字状に開きながら刃部と接する。袋部平面は端部に向かうにつれ、若干開き気味の形となる。袋部の内側には僅かに木質が付着しており、着柄されていたことが推察される。



第19图 埴田後山明神4号墳 主体部調査区出土遺物実測図 (S-1/6, 1/3)

### (3) トレンチ調査区 (第15図、第20図)

主体部の痕跡を確認したことから、本古墳の周溝についても残存の可能性が考えられたため、主体部調査区の北側にトレンチを3本(Aトレンチ、Bトレンチ、Cトレンチ)設定し、その検出を試みたものである。またこれらのトレンチを総称し、「トレンチ調査区」と呼称した。調査は最初にAトレンチを設定し掘削を行い、その調査状況に応じて順次B、Cトレンチへと、範囲を拡張していった。

**Aトレンチ** 長さ約3m、幅約1mの範囲を設定。北側一帯で、一見周溝と思われる痕跡を検出する。幅120cm以上、深さ55cm以上を測り、溝状を呈するものであったが、土層の堆積は乱れ、掘り方も不整であった。また主体部からの位置も、距離的に疑問であったため、最終的に風倒木痕と判断した。

**Bトレンチ** 長さ約4m、幅約50cmの範囲を設定。北端において、周溝と考えられる落ち込みを検出した。墳丘の裾部にあたると考えられる。

**Cトレンチ** 当初、長さ約2m、幅約50cmの範囲を設定し掘り下げたが、周溝を検出したため、途中でセクションの向きを変更し、一部を拡張したものである。周溝の残存状況は良好で、幅180cm以上、深さ100cm以上を測るものであった。出土遺物は特に6層から10層までの周溝下層から顕著に見られ、多くの土師器片及び須恵器の器台片が出土している。

### (4) トレンチ調査区出土遺物 (第21図)

遺物箱(555×395×142mm)1箱に満たない出土量であったが、土器が出土している。その大半が土師器で、須恵器は器台破片のみであった。また出土した土器のほとんどが細片で占められており、図化し得えた遺物は5点のみであった。

### 器台 (1・2)

1はCトレンチ内の周溝第6層直下から7層中より出土したもので、4点の須恵器破片を確認している。互いの接合関係は不明であるが、胎土や器面装飾の様相から同一個体の器台であると判断できる。その内、図化し得たのは脚部破片で、脚端部径は30.6cmを測る。外面は上下段に3条の沈線めぐるせ、その沈線間に2条の櫛描波状文を施している。スカシは三角形のものが、上下段の沈線を介して少なくとも2段にわたり配される。また胎土の緻密さや焼成の堅緻さは、在地品とは明瞭な違いを見せており、陶器産のものとは比定できる。

2はAトレンチ内の土坑から出土した、土師器の器台脚部破片である。円形の穿孔が認められ、脚が「ハ」の字状に開く小型器台と考えられる。

### 高坏 (3)

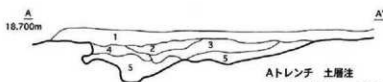
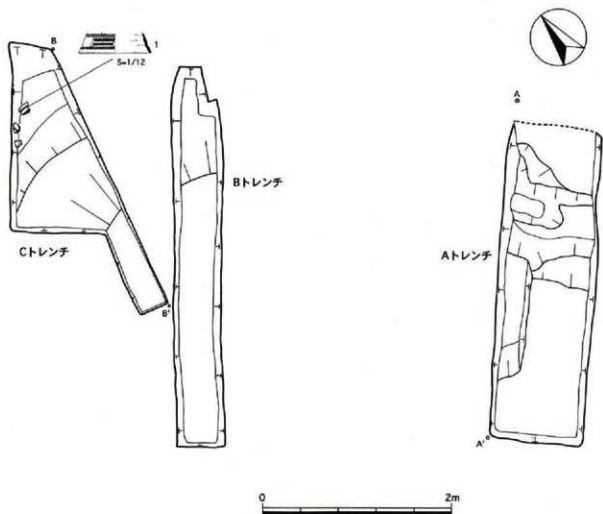
表土層より出土した、土師器の高坏脚部破片である。継ぎ目が確認されるため、坏部と脚部が接合したものである。

### 壺 (4)

覆土より出土した土師器の口縁部破片であり、口径11.8cmを測る。端部はその外面下端を膨らませ有段をつくり、外反した器形を呈す。内外面ともに摩耗が著しい。

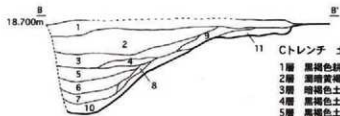
### 甕 (5)

Cトレンチ周溝下層より出土した弥生土器の甕口縁部破片であり、口径19.3cmを測る。口縁部の外面に縦凹線文を施し、端部へ向かい外反気味に直立する。時期は月影期に属するものと考えられる。



Aトレンチ 土層注

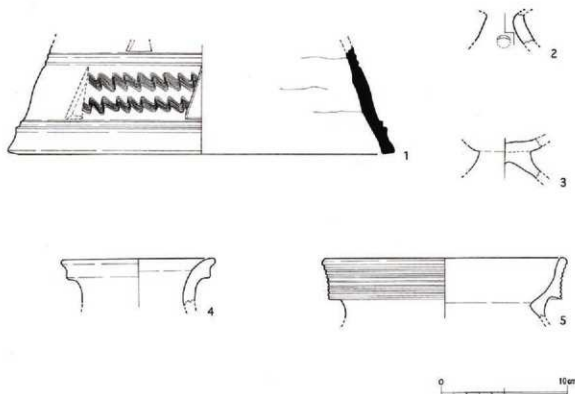
- |    |        |                                 |
|----|--------|---------------------------------|
| 1層 | 黒褐色緑作土 | 黄褐色粘土ブロック中量含有、炭化物多量含有           |
| 2層 | 暗褐色土   | 黄褐色粘土粒、ブロック中量(1層より多い)含有、炭化物少量含有 |
| 3層 | 暗黄褐色土  | 黄褐色粘土粒多量含有、ブロック中量含有             |
| 4層 | 暗黄褐色土  | 3層に比し、硬化した黄褐色粘土ブロック極めて多量含有      |
| 5層 | 黄褐色土   | 斑状に黒味部分を含有、しまりなし                |



Cトレンチ 土層注

- |     |        |                                |
|-----|--------|--------------------------------|
| 1層  | 黒褐色緑作土 |                                |
| 2層  | 黄褐色土   | 地山土粒多量含有                       |
| 3層  | 暗褐色土   | 墳丘側に向かってやや粘性を増し、地山土粒をやや多く含有    |
| 4層  | 黒褐色土   | 3層と5層の中間的な層                    |
| 5層  | 黒褐色土   | 6層より黒味が強く、7層よりやや褐色を帯びる         |
| 6層  | 黒褐色土   | 焼土ブロック・炭化物中量含有                 |
| 7層  | 黒色土    | 焼土ブロック・炭化物少量含有                 |
| 8層  | 淡褐色土   | 地山土ブロックを多く含有、9層の連続層か           |
| 9層  | 淡褐色土   | 8層に比し、地山土ブロックが全体に均質に含有し、粘性を帯びる |
| 10層 | 暗黄褐色土  | 黒褐色土と黄褐色土がブロック状に含有             |
| 11層 | 黄褐色土   | やや薄る地山層移層                      |

第20図 埴田俊山明神4号墳 トレンチ調査区実測図 (S=1/40)



第21図 埴田後山明神4号墳 トレンチ調査区出土遺物実測図 (S=1/3)

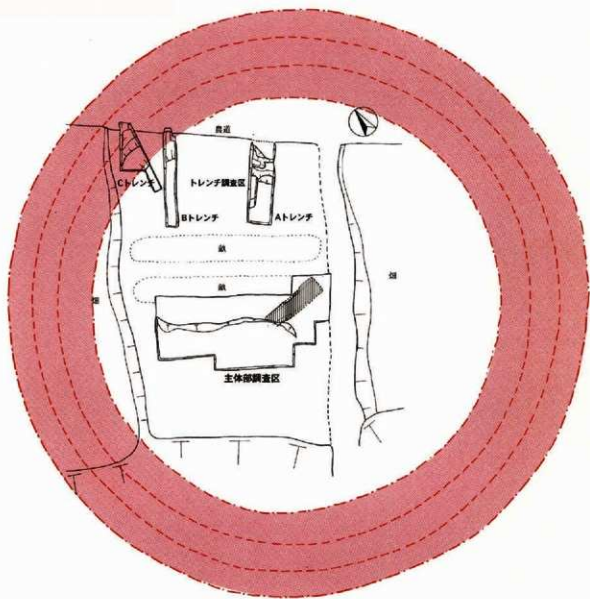
### 第3節 小結

主体部調査区からの棺床と思われる粘土ブロックの残存により、埋葬施設として割竹形木棺の採用が想定され、白玉や櫛の出土位置及び鉄製品の錆痕から、被葬者は主体部の東側に頭位を向け、安置されていたものと推察できる。またトレンチ調査区からの周溝検出により、主体部を中心とした場合の古墳の規模は、直径約19mの円墳であると判断された(第22図)。本墳の時期については出土物の様相から、5世紀後半という年代が与えられよう。

最後に、本調査の原因は畑の耕作中の不時発見による。「こういった開墾の継続もまた、ある一定の限度をすぎれば、破壊に等しい開発行為であると言える」(小松市教委 1989b)との警句を、今一度重く、受け止めねばならない。

#### 引用・参考文献

- 石川考古学研究会, 1996:『石川県考古資料調査・集成事業報告書 武器・武具・馬具Ⅰ』
- 国府村史編纂委員会, 1956:『国府村史』 国府村役場
- 小松市教育委員会, 1989a:『後山無常堂古墳・後山明神3号墳』
- 小松市教育委員会, 1989b:『市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ』
- 小松市教育委員会, 2004:『八里向山遺跡群』
- 小松市教育委員会, 2006:『小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
- 藤原祐一, 1995:『白玉研究試論』『研究紀要第3号』 (財)榊木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 辰口町教育委員会, 2004:『下開発茶白山古墳群Ⅱ』



第 22 図 埴田後山明神 4 号墳 周溝復元図 (S-1/150)

第8表 埴田後山明神4号墳 鉄刀計測表

(単位: cm)

図版	番号	出土地点	全長	刀身部			茎部			備考
				長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	
18	1	主体部調査区	(97.0)	(72.3)	4.5	0.7	14.7	1.8	0.6	鞘木残存
18	2	主体部調査区	(95.1)	(84.7)	4.1	1.0	(10.4)	2.1	1.0	鞘木・把木残存

第9表 埴田後山明神4号墳 鉄鏢計測表

(単位: cm)

図版	番号	出土地点	全長	鏢身部			柄部			備考
				長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	
18	3	主体部調査区	(12.8)	5.7	0.8	0.3	7.8	0.5	0.4	片刃長柄式
18	4	主体部調査区	(11.2)	(5.5)	0.8	0.2	(6.4)	0.5	0.3	片刃長柄式
18	5	主体部調査区	(24.5)	(3.4)	(1.9)			0.9	0.5	柳葉長柄式? 把木残存
18	6	主体部調査区								片刃長柄式、18木接合

第10表 埴田後山明神4号墳 鉄斧計測表

(単位: cm, g)

図版	番号	出土地点	全長	刃部長	刃幅	刃部厚	袋部幅	袋部厚	重量	備考
18	8	主体部調査区	8.7	4.2	(4.3)	0.8	3.6	0.3	115.79	

第11表 埴田後山明神4号墳 白玉計測表

(単位: mm, g)

図版	番号	出土地点	直径	長さ	孔径	重量	研磨		備考
							孔面	側面	
19	1	主体部調査区	3.2	2.0	1.2	0.04	横	両面	
19	2	主体部調査区	3.2	1.9	1.2	0.03	横	両面	
19	3	主体部調査区	3.3	2.1	1.2	0.03	横	両面	
19	4	主体部調査区	3.3	1.8	1.0	0.04	横	両面	
19	5	主体部調査区	3.4	1.2	1.6	0.02	横	両面	
19	6	主体部調査区	3.4	2.6	1.3	0.05	横	両面	
19	7	主体部調査区	3.5	2.0	1.2	0.04	横	両面	
19	8	主体部調査区	3.5	1.8	1.1	0.04	横	両面	
19	9	主体部調査区	3.6	1.9	1.4	0.05	横	両面	
19	10	主体部調査区	3.6	1.5	1.3	0.03	横	両面	
19	11	主体部調査区	3.7	1.9	1.1	0.04	横	両面	
19	12	主体部調査区	3.7	2.1	1.2	0.05	横	両面	
19	13	主体部調査区	3.8	2.0	1.2	0.06	横	両面	
19	14	主体部調査区	3.8	2.2	1.2	0.06	横	両面	
19	15	主体部調査区	3.9	2.3	1.1	0.07	横	両面	
19	16	主体部調査区	3.9	1.6	1.4	0.04	横	両面	
19	17	主体部調査区	4.0	2.3	1.1	0.07	横	両面	
19	18	主体部調査区	4.0	2.3	0.9	0.07	横	両面	
19	19	主体部調査区	4.1	2.4	1.5	0.07	横	両面	
19	20	主体部調査区	4.2	2.0	1.1	0.06	横	両面	
19	21	主体部調査区	4.2	2.1	1.6	0.06	横	両面	
19	22	主体部調査区	4.3	2.2	1.1	0.08	横	両面	
19	23	主体部調査区	4.3	2.4	1.3	0.08	横	両面	
19	24	主体部調査区	4.4	2.2	1.0	0.07	横	両面	
19	25	主体部調査区	4.4	2.4	1.4	0.08	横	両面	
19	26	主体部調査区	4.5	2.0	1.1	0.08	横	両面	
19	27	主体部調査区	4.5	2.6	1.2	0.08	横	両面	
19	28	主体部調査区	4.5	2.6	1.3	0.09	横	両面	

第12表 埴田後山明神4号墳 土器観察表

図版	番号	出土地点	分類1	分類2	名称	法量(cm)	胎土	焼成	色調	調整	備考
21	1	Cトレンチ 周溝	黒色層	須恵器	その他	器台 脚部径30.6 残存高8.7	緻密	堅緻	灰		脚部破片、陶色産
21	2	Aトレンチ 黒例木塚	土師器	その他	器台 脚部径3.0 残存高2.5	密	良好	橙			脚部破片
21	3	Bトレンチ調査区	灰土層	土師器	食器具	高坏 脚部径4.0 残存高3.2	密	良好	橙		脚部破片
21	4	Cトレンチ調査区	覆土	土師器	貯蔵具	蓋 口径11.8 残存高3.8	粗	不良	明黄褐		口縁部破片
21	5	Cトレンチ 周溝	下層	弥生土器	貯蔵具	壺 口径19.3 残存高4.8	密	不良	浅黄		口縁部破片



## 第IV章 薬師遺跡発掘調査

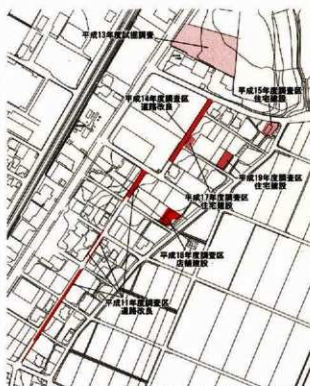
### 第1節 調査の概要

#### 1. 既往の調査

薬師遺跡が所在する矢崎町北部は、国道8号線沿いに各種店舗が建ち並ぶが、その背後には農地が広がり、眼下に木場湯を控えて白山を望む風光明媚な段丘地であった。しかし、近年になり市道矢崎1・2号線の道路改良工事や、水道・下水管の布設等インフラが整備され、急速に宅地化が進んでいる。このため、当遺跡内での埋蔵文化財の取扱いについての協議や、試掘調査・発掘調査の件数も増加している。

過去には、市道矢崎1号線・2号線道路改良工事に伴う発掘調査（平成11・14年度）、住宅建設に伴う発掘調査（平成15・17年度）が実施されている。また、今回報告する店舗建設に伴う発掘調査（平成18年度）に加え、平成19年度にも住宅建設に伴う発掘調査を実施している。

これらの調査により、薬師遺跡が7世紀前半から9世紀後半にかけて営まれた集落であることや、鉄製品の生産などの手工業生産に関連した集落であることが明らかになってきた。さらに、平成17年度の調査においてL字型カマドを伴う竪穴建物が確認されており、額見町遺跡、額見町西遺跡、矢田野遺跡といった月津台地の南西部に立地する遺跡と同様の渡来系移民の集落としての性格も窺えるようになった。



第23図 薬師遺跡 調査区位置図1 (S=1/5,000)

#### 2. 調査に至る経緯

平成18年2月23日付けで田嶋明美氏より小松市教育委員会埋蔵文化財調査室に対し、店舗建設に係る埋蔵文化財の取扱いについて協議があった。当該事業区域が周知の埋蔵文化財包蔵地「薬師遺跡」に含まれることから、地下の埋蔵文化財の有無及び状況を確認するため試掘調査が必要である旨回答した。これに対し埋蔵文化財試掘調査の依頼が提出され、平成18年3月2日に人力による試掘調査を実施した。試掘調査の結果、事業区域の一部は既に削平を受けているが、その他の区域については遺物の出土等から「薬師遺跡」が存在することが確認された。

その後、埋蔵文化財の状況と工事計画との調整を行った結果、工事では埋蔵文化財が確認された区域全域を掘削する必要があることから、埋蔵文化財の現状保存は不可能と判断した。よって、埋蔵文化財が確認された区域350㎡を対象に発掘調査を実施することとなった。発掘調査に係る経費については、店舗建設ではあるが事業者が個人であることから、国庫補助事業の対象と認め、平成18年度市内遺跡発掘調査事業において支出した。なお、重機による表土除去作業に係る経費については田嶋氏が負担した。

平成18年4月7日付けの埋蔵文化財発掘調査の依頼を受け、4月17日に発掘調査実施の回答、埋蔵文化財の取扱いに関する協定書の締結を行い、4月24日より現地調査に着手した。

### 3. 調査の経過

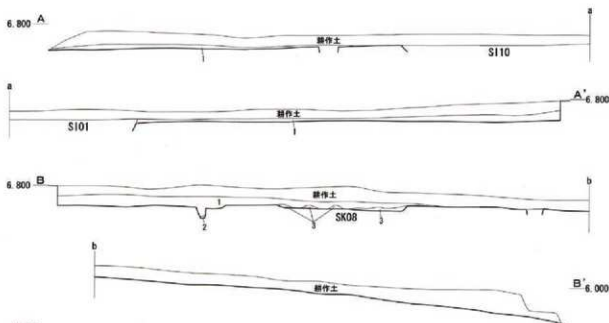
試掘調査の結果、事業区域内、南東側の区域については既に削平を受けていることが確認されており、当初は調査対象とはしていなかった。しかし、表土除去をしてみると、削平は受けているものの一部で遺構の下底部が検出されたため急遽調査対象区域を拡げることとした。これにより、当初240㎡の予定であった調査対象面積は、調査完了時には350㎡となった。

なお、調査完了後、引き続き造成工事を実施するというので、埋め戻し等は行わず現状のまま引き渡し、現地調査を完了した。

- 4月24日：現地調査開始。表土除去。  
仮設建物・仮設トイレ設置。
- 4月25日：グリッド設定。
- 4月26日：遺構検出作業開始。
- 5月12日：SK05・06・07完掘。
- 5月18日：SK08遺物取り上げ。
- 5月22日：SK08完掘。
- 5月24日：SB08完掘。
- 5月25日：SB06・07完掘。
- 6月5日：SI10床上完掘、写真撮影。
- 6月7日：SI10床下完掘。
- 6月8日：全景写真撮影。器材等撤収。  
現地調査完了。



第24図 薬師遺跡 調査区位置図2 (S=1/1,000)

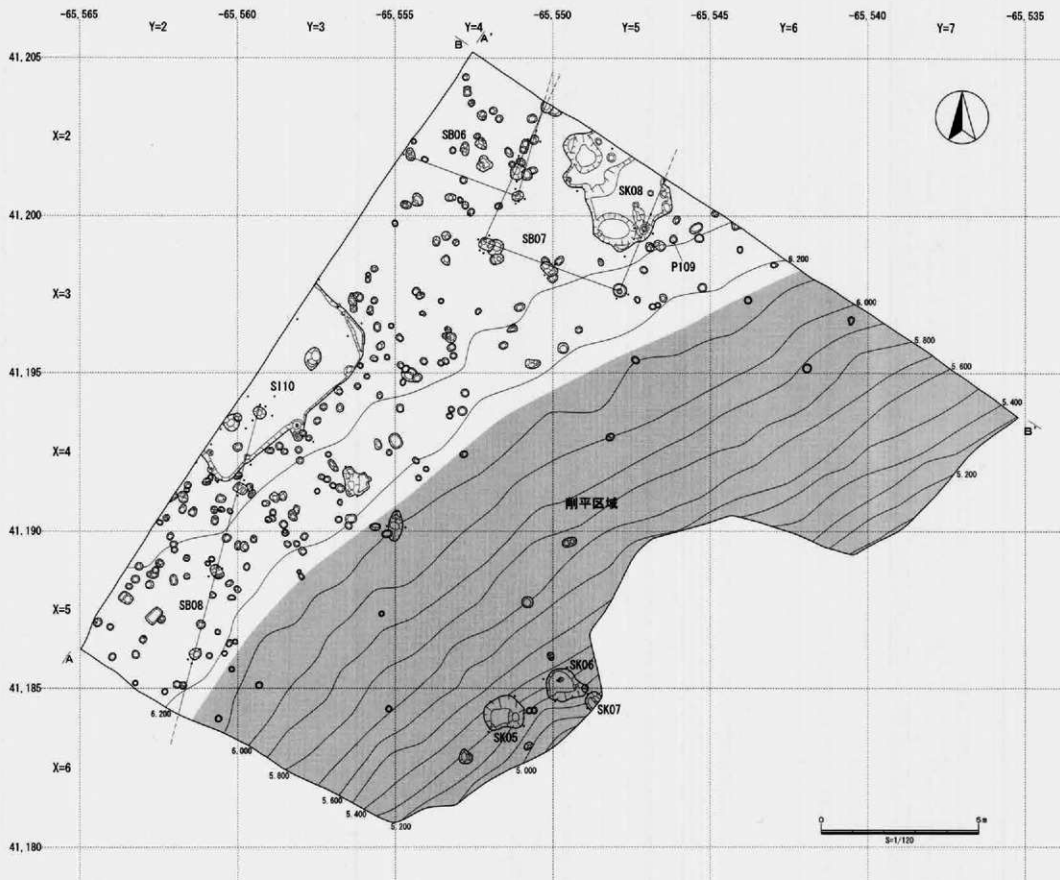


#### 土層注

- 1層 黒褐色壤土 (10YR3/2) に明褐色壤土 (7.5YR5/6 地山) 僅かに混じる 炭化物含む
- 2層 地山に1層少し混じる かくしまる
- 3層 1層と地山の混層



第25図 薬師遺跡 土層断面図



第26図 築師遺跡 平面図



## 第2節 遺構

### 1. 竪穴建物

#### S110

調査区西端、3、4-2、3Grに位置する。約3/5が調査区外となるため全体の形は不明だが、確認できる部分では、方形で一辺6.4mのプラン。主軸はN-38°-W、もしくはN-52°-Eである。

主柱穴はP250・P251の二つを確認した。他は調査区外。柱間規模は3.4mを測る。P250は径50cmの円形プランで、深さ50cm。P251は径70cm×50cmの楕円形プランで、深さ55cm。いずれも柱痕は確認できず、柱の抜き取り後、埋め戻されたものと考えられる。柱穴の底面は硬く締まる。P237はSB08の柱穴で、S110が埋没後に掘削されている。

遺構上面は後世の耕作により削平を受けており、検出面から床面までは15cm程度である。覆土は橙色壤土が僅かに混じる黒褐色壤土のほぼ単一層。覆土内からは土師器煮炊具の破片の他、須恵器片、鉾澤が出土する。図示できるものとしては、須恵器坏H蓋(11・12・13)、土師器小釜(25)がある。これらは、古代I1期(7世紀前半)に位置づけられる。

床面は平坦で、ほぼ全体に貼床が施される。南東側の主柱穴間が硬く締まることから、こちら側が入り口の可能性がある。掘り方土坑は、竪穴中央と南隅に深さ35cm程の土坑が、北東壁沿いに深さ15cm程度の浅い土坑が掘られている。南隅の土坑からは、古代I1期の土師器小釜(24)や鉄鏃(28)が出土。その他、掘り方土坑や掘り方覆土から土師器片、鉾澤が出土している。

カマドは確認できなかったが、調査区外となる北西もしくは南西壁に付くのであろう。建物の形態や規模は、平成17年度調査区で確認されたものとよく似ており、7世紀前半という時期を考えるとこの建物にもL字型カマドを伴う可能性がある。

### 2. 竪立柱建物

#### SB06

調査区の北隅、2-4Grに位置する。桁行1間、梁行2間の柱列を確認したが、残りは調査区外となる。全体の形は不明だが、側柱建物と考えられる。規模は、確認できる部分で3.1×3.6m。柱間寸法は桁間1.8m、梁間1.8m。主軸はN-14°-E。

柱穴プランは円形・楕円形で、P37のみ径20cm、深さ28cmとやや小さめだが、その他は径25~40cm、深さ30~45cmとしっかり掘られている。柱痕は確認できず、柱の抜き取り後、埋め戻されたものと考えられる。SB07と重複するが、遺構の切り合いはない。出土遺物から判断するとSB06の方が古いと考えられる。

遺物は、P45より古代II3~III期(8世紀前半)に位置づけられる須恵器坏B蓋(15)、短頸壺蓋(19)が出土。その他、P29より土師器片、鉾澤が出土する。

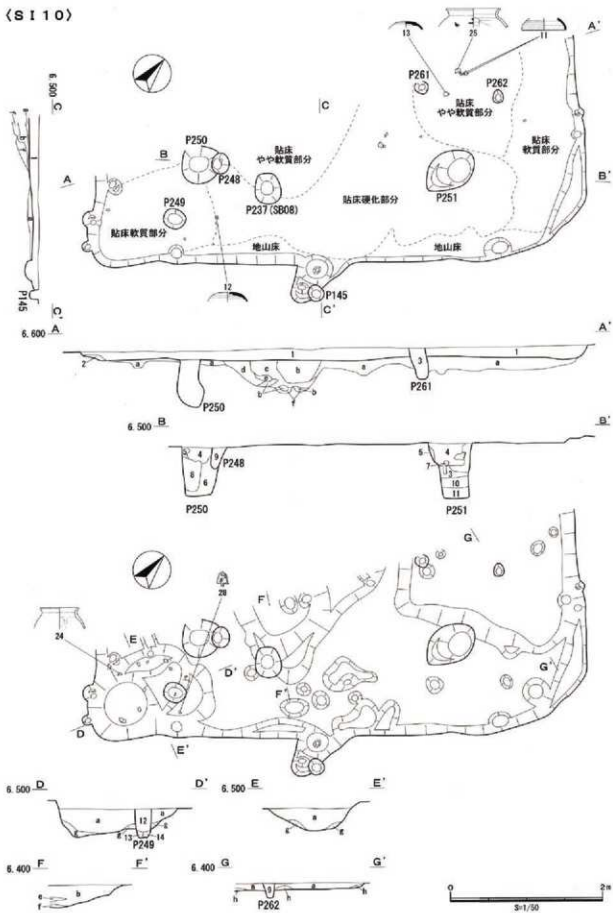
#### S110 土層柱

- 1層 黒褐色壤土(10YR3/2)に橙色壤土(7.5YR6/8 地山)僅かに混じる炭化物少し含む
- 2層 1層と地山の混層
- 3層 黒褐色壤土(10YR3/2)に地山僅かに混じる 炭化物少し含む
- 4層 黒褐色壤土(10YR3/2) 炭化物僅かに含む
- 5層 4層に地山混じる
- 6層 灰黄褐色壤土(10YR4/2) 炭化物僅かに含む しまりなし
- 7層 4層に地山少し混じる
- 8層 6層に地山混じる 4層粒状に僅かに混じる しまりなし
- 9層 黒褐色壤土(10YR3/2) 炭化物僅かに含む
- 10層 地山に明黄褐色壤土(10YR7/6)ブロック状に少し混じる しまりなし
- 11層 地山に黒褐色壤土(10YR3/1)・灰黄褐色壤土(10YR4/2)ブロック状に僅かに混じる かくくしまる

- 12層 黒褐色壤土(10YR2/2) 炭化物少し含む
- 13層 12層に地山混じる
- 14層 地山に12層少し混じる かくくしまる

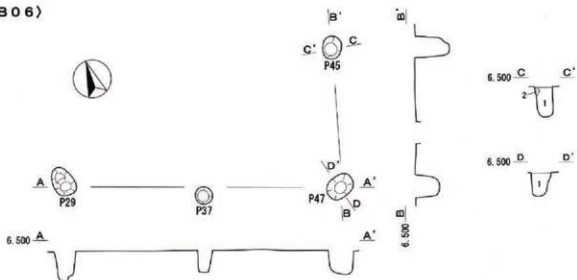
- a層 黒褐色壤土(10YR3/2)に地山僅かに混じる炭化物僅かに含む
- b層 暗褐色壤土(10YR3/3) a層と似るが少し黒っぽい炭化物僅かに含む
- c層 暗褐色壤土(10YR3/3) 炭化物僅かに含む
- d層 暗褐色壤土(7.5YR3/3) 炭化物僅かに含む
- e層 e層に地山ブロック状に少し混じる
- f層 b層と地山の混層
- g層 灰黄褐色壤土(10YR4/2)に地山少し混じる
- h層 地山に暗褐色壤土(10YR3/3)混じる

(S110)



第27図 薬師遺跡 遺構実測図1

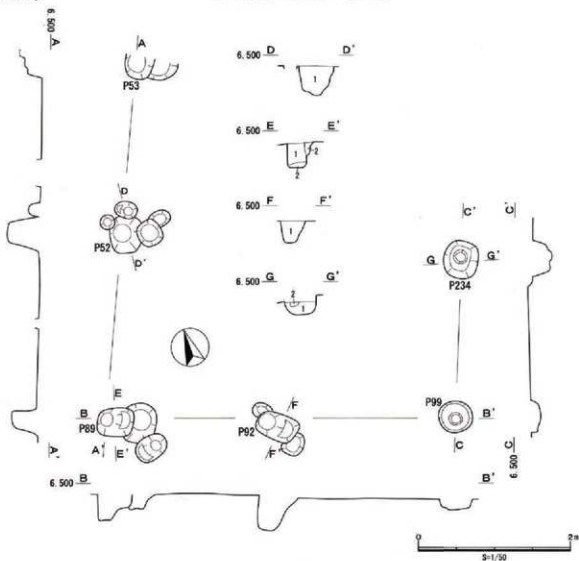
(SB06)



SB06・07 土層柱

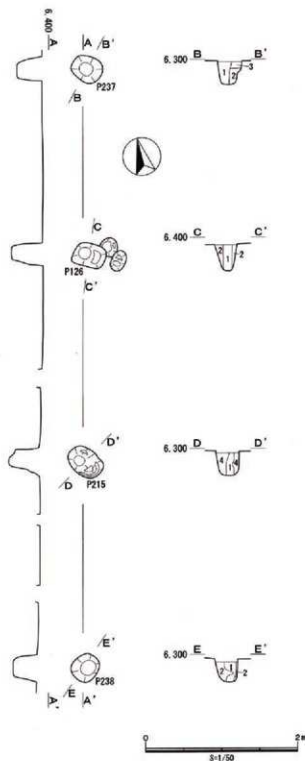
1層 黒褐色埴土 (10YR3/2) に明褐色埴土 (7.5YR5/6 地山) 僅かに混じる 炭化物を含む  
2層 黒褐色埴土 (10YR3/2) と地山の混層

(SB07)



第28図 薬師遺跡 遺構実測図2

(SB08)



SB08 土層柱

- 1層 黒褐色砂壤土 (10YR3/2) しまりなし 柱痕
- 2層 黒褐色砂壤土 (10YR3/2) に橙色壤土 (7.5YR6/6 地山) 混じる  
炭化物僅かに含む しまりなし
- 3層 黒褐色砂壤土 (10YR3/2) と地山の混層 炭化物僅かに含む  
しまりなし
- 4層 黒褐色壤土 (10YR3/2) 炭化物僅かに含む

第29図 薬師遺跡 遺構実測図3

SB07

調査区の北端、2, 3-4, 5Grに位置する。桁行2間、梁行2間の柱列を確認したが、残りは調査区外となる。全体の形は不明だが、側柱建物と考えられる。規模は、確認できる部分で4.7×4.5m。柱間寸法は桁間2.4~2.1m、梁間2.4~2.1m。主軸はN-24°-E。

柱穴プランは円形・方形で、径35~55cm、深さ15~45cmを測る。東側のP99・234が他の柱穴に比べ浅いのは、上部の削平が顕著なためと思われる。柱痕は確認できず、柱の抜き取り後、埋め戻されたものと考えられる。SB06、SK08と重複する。前後関係は、遺構の切り合いや出土遺物より、SB06、SK08、SB07の順と考えられる。

遺物は、P99より古代VI期（9世紀中頃~10世紀初頭？）の土師器外赤彩内黒椀（22）が出土。その他、P52・53・92・234より土師器片、P53・89・92・99より鉾澤が出土する。

SB08

調査区の南西、4, 5-2, 3Grに位置する。桁行3間の柱列を確認した。残りは調査区外となり、全体の形は不明だが、対応する柱穴が見あたらないので側柱建物と考えられる。規模は、確認できる部分で7.9m。柱間寸法は2.7~2.4m。主軸はN-14°-E。

柱穴プランは楕円形・方形で、径20~45cm、深さ30~35cmを測る。柱穴覆土より柱痕が確認できる。これにより、柱は径15cm程度と考えられる。比較的大い柱間寸法の割に、柱穴・柱の規模は小さい。S110と重複する。遺物は出土しておらず時期は不明だが、遺構の切り合い(P237)からS110の方が古いことが分かる。

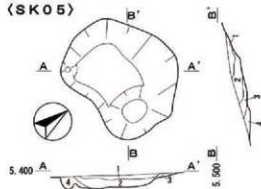
3. 土坑

SK05

調査区の南端、6-4Grに位置する。遺構上部は削平を受けており、下底部のみが確認された。全体の形は不明。規模は残存部分で径115×110cm、深さ15cm。南東隅で1段低くなる。遺物は出土しておらず時期は不明。



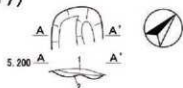
(SK05)



SK05 土層註

- 1層 黒褐色壤土 (7.5YR3/2) に明褐色壤土 (10YR6/6 地山) 少し混じる炭化物少し含む
- 2層 にぶい黄褐色壤土 (10YR4/3) に地山混じる 炭化物少し含む  
黒色シルト質壤土 (10YR2/1) ブロック状に僅かに混じる
- 3層 地山ににぶい黄褐色壤土 (10YR4/3) 少し混じる 炭化物少し含む
- 4層 にぶい黄褐色壤土 (10YR4/3) に地山僅かに混じる

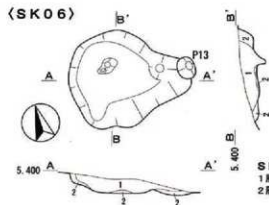
(SK07)



SK07 土層註

- 1層 灰黄褐色壤土 (10YR4/2) 炭化物少し含む
- 2層 1層に明黄褐色壤土 (10YR6/6 地山) 混じる

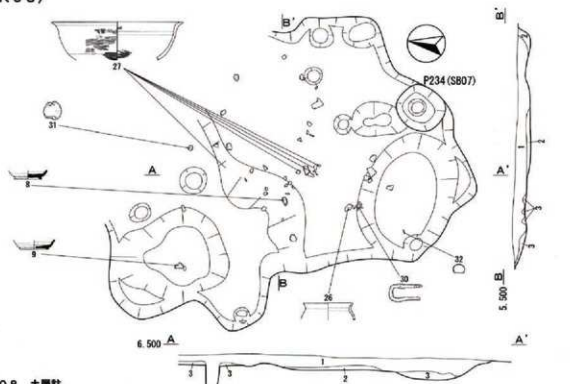
(SK06)



SK06 土層註

- 1層 黒褐色壤土 (10YR3/2) 炭化物少し含む
- 2層 1層と明黄褐色壤土 (10YR6/6 地山) の混層

(SK08)



SK08 土層註

- 1層 黒褐色壤土 (10YR3/2) 炭化物含む
- 2層 明褐色壤土 (10YR3/3) に1層混じる 地山ブロック少し混じる
- 3層 1層と褐色壤土 (7.5YR6/6 地山) の混層



第30図 薬師遺跡 遺構実測図4

## SK06

調査区の南、5、6-4、5Grに位置する。SK05と同様、遺構上部は削平を受けており、下底部のみ確認された。全体の形は不明、底面は比較的平坦である。規模は残存部分で径125×95cm、深さ20cm。覆土は炭化物を少し含む黒褐色壤土のほぼ単一層。

遺物は、須恵器坏A(2)、須恵器片、土師器片の他、鍛造剥片や粒状滓を含む多量の鉾滓、輪の羽口の破片が出土している。須恵器坏Aは、古代Ⅱ3期(8世紀初頭～前半)に位置づけられる。多量の鉾滓や輪の羽口が出土するが、被熱面が確認されないことや覆土に炭などがそれほど含まれていないことから、鍛冶関連の廃棄土坑と考えられる。

## SK07

調査区の南、6-5Grに位置する。遺構上部及び東側は削平を受けており、全体の形は不明。規模は残存部分で径50×40cm、深さ10cm。遺物は土師器片1点の他、鉾滓が出土している。隣接するSK06とは同一の遺構とも考えられる。

## SK08

調査区の北、2、3-5Grに位置する。北東側が調査区外となり、全体の形は不明。規模は残存部分で径400×280cm、深さ15～25cm。西隅と南隅に1段低くなる部分がある。覆土は炭化物を含む黒褐色壤土のほぼ単一層。SB07と重複する。SB07の柱穴(P234)に切られることや、出土遺物からSK08の方が古いことが分かる。

須恵器坏B身(6,8,9,10)、土師器小釜(26)、鍋(27)など、古代Ⅱ3～Ⅲ期(8世紀初頭～中頃)に位置づけられる遺物が出土する。その他、刀子?(29)、不明鉄製品(30)、石鐘(31)、石帯の丸軋(32)、鉾滓等が出土している。

## 第3節 遺物

調査区の約半分が削平を受けていることもあり調査面積の割に遺物量は少なかった。遺物は、須恵器285点、土師器785点、石製品・鉄製品が少量と、鉾滓などが出土した。多くがSI10、SK08からの出土で、7世紀前半、7世紀後半～8世紀前半のものが中心となる。その他、縄文時代、6世紀前半、9世紀後半頃の遺物もわずかに出土している。

### 1. 須恵器

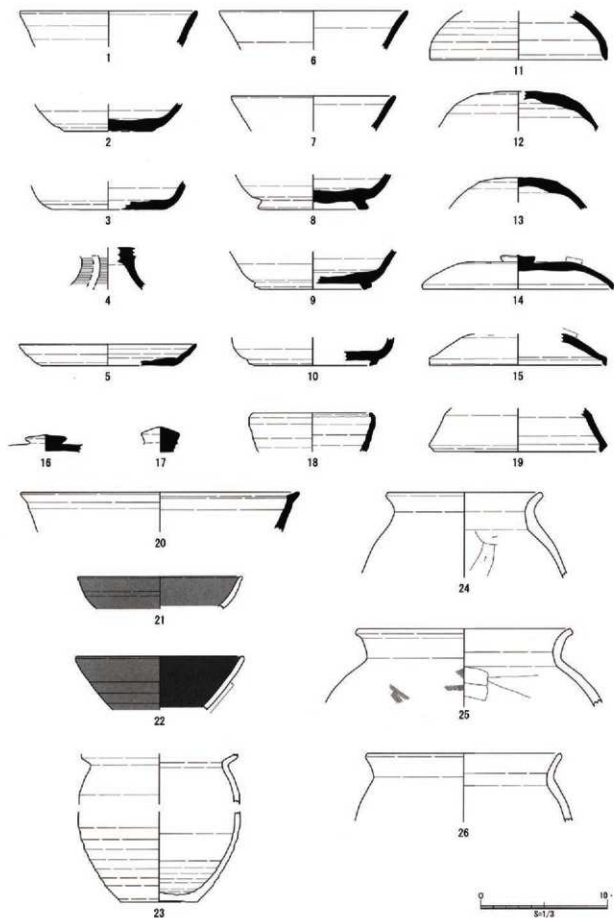
1～3は坏A。2は底部の破片、SK06より出土、古代Ⅱ3期のもの。

4は高坏の脚部。底脚で透かしをもつ、坏部の形態は不明。6世紀前半頃のものと考えられる。平成17年度の調査においても6世紀前半代に遡る須恵器蓋坏が出土している。これまでの調査の結果からは粟師遺跡内での同時期の集落の存在は考えにくいので、近接する矢崎B古墳(6世紀後半?)など古墳との関連を考慮すべきであろう。

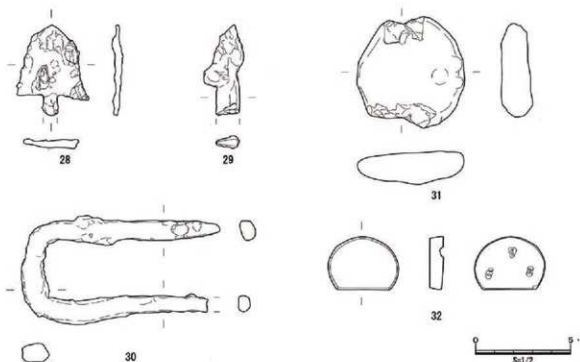
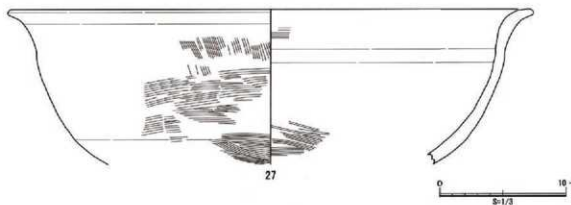
6～10は坏B身。8・9は古代Ⅱ3期、10は古代Ⅲ頃のもの、SK08からの出土。

11～13は坏H蓋。11は口縁部の破片、口径13.8cm。12・13は天井部の破片、ヘラ切り未調整。11～13いずれも古代Ⅰ1期、SI10より出土する。

14～17は坏B蓋。14・15は天井部にケズリ調整、古代Ⅱ3期のもの。15はSB06(P45)より出土する。16・17はつまみのみである。



第31圖 美師遺跡 遺物実測圖 1



第32図 薬師遺跡 遺物実測図2

18は碗。金属器を模倣したものであろう。時期は7世紀中頃から後半頃と考えられる。

19は短頸壺蓋。口径13cm、S B O 6 (P45) より出土。古代Ⅲ期頃のものか。

20は広口壺と考えられる。口縁部の破片、口径22cm、時期は特定できない。

## 2. 土師器

21は赤彩碗。内外面に赤彩が施される。古代Ⅱ3～Ⅲ期頃のものか。

22は外赤彩内黒碗。口縁部の破片であり底部は不明、体部下位にケズリ調整が施される。古代Ⅵ期のもの、S B O 7 (P99) より出土する。

23～26は小釜。23は平底で底面に糸切り痕が残る。口縁端部が欠損する。古代Ⅵ期頃のものだろう。24は内面ケズリ調整、外面は調整不明。25は外面ハケ、内面ケズリ調整。24・25ともにS I 1 0より出土、古代Ⅰ1期のもの。26は、表面の剝離が激しく調整等は不明。古代Ⅱ3期のもので、S K O 8より出土する。

27は鍋。口径41cm、内外面にハケ目調整を施す。古代Ⅱ3期、S K O 8より出土。

### 3. 鉄製品

28は鉄鏝。平面は長三角形もしくは五角形、断面は平である。茎の先端は欠損しており残存長4.8cm、幅は3.7cm。S I I 0の掘り方土坑より出土、7世紀前半のものと考えられる。

29は刀子であろうか。欠損しており全体形は不明。断面は三角形である。SK08より出土。

30は不明鉄製品。断面長方形の棒をU字形に曲げたもの。これもSK08より出土する。

### 4. 石製品

31は石鏝。5.9×5.6×1.7cm、重さ71g。両端を打ち欠いている。材質は火山凝灰岩。SK08から出土するが、薬師遺跡（平成11年度調査区）、今江五丁目遺跡、矢崎宮の下遺跡など、当遺跡や周辺の遺跡で出土している石鏝と同様に縄文時代中期のものであろう。

32は石帯（丸柄）。2.8×3.7cm、厚さ0.7cm。平面は蒲鉾形（半円形）で、断面は台形を呈する。裏面には2孔1対の留め穴が3ヶ所に穿たれている。材質は珪質頁岩。表面及び側面は研磨されているが、裏面は研磨されていない。裏面の周辺の稜には面取りがされている。SK08から出土することから8世紀前半のものか。

## 第4節 小結

今回の調査では、7世紀前半の堅穴建物、8世紀前半・9世紀後半頃の掘立柱建物、8世紀前半の鍛冶関連の土坑などの遺構、7世紀前半～9世紀後半にかけての須恵器・土師器の他、鉄製品・羽口・鉾津などの鍛冶関連遺物が確認された。7世紀前半の堅穴建物から鉄製品や鉾津が出土することから、集落の成立時から鉄製品の生産に関わっていたことが窺える。また、薬師遺跡の性格を考える上での新たな資料として、石帯（丸柄）の出土があげられる。石帯は律令制度における身分を表象するものであり、ある一定のレベル以上の遺跡において出土する特殊な遺物といえる。この石帯の出土により当遺跡の性格に公的な一面も加わることとなる。

薬師遺跡は、7世紀前半に形成され10世紀代（12世紀代）まで長期にわたり継続する点、手工業生産に関連する集落である点、L字形カマドを伴う堅穴建物の存在など渡来系移民との関連が窺われる点、公的（官衙的）な遺物が出土する点など、同じ月津台地上の南西に位置する額見町遺跡と似たような性格を持つ集落であることが分かってきた。薬師遺跡と額見町遺跡は、月津台地のそれぞれ北東端と南西端に、また、木場潟・日用川と、柴山潟・動橋川とに水系を分けて立地する当地域の中核的な集落であったと考えられる。そして、弘仁14年（823年）の加賀立国には、江沼臣や道君といった加賀地方の在地首長層の経済的基盤を破壊し、地域社会を再編成するという目的があったともいわれており、江沼・能美の分郡時の郡境が、地形的なまとまりである月津台地の北端ではなく、ちょうど薬師遺跡と額見町遺跡の間を分断するように設定されることも、江沼臣の重要な経済基盤である手工業生産域の分割を示すものではないだろうか。

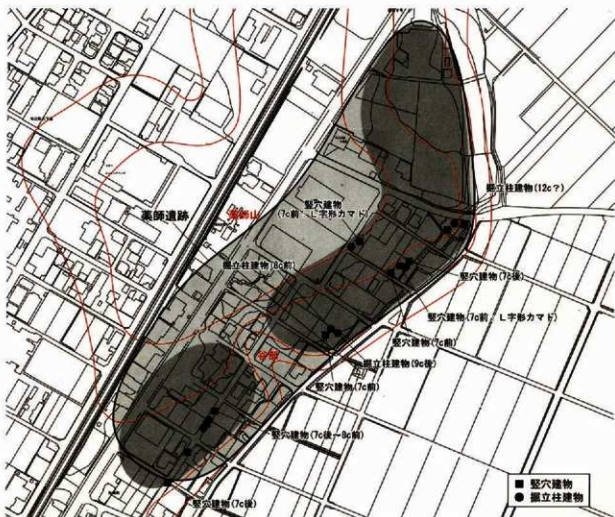
最後に、周辺の地形と薬師遺跡の遺構の分布・変遷を見てみよう。薬師遺跡は、西に位置する薬師山（現在は消失）と、東に広がる木場潟周辺の低湿地に挟まれた台地の縁に立地する。木場潟は今江潟、梯川とつながっており水運の便に富んだ場所といえる。この水運により木場潟を挟んだ対岸や日用川流域に分布する製鉄遺跡群へのアクセスも容易である。南北に細長く分布する集落域は、木場潟から入り込んだ谷部により大きく南北に分かれる。また、谷部の北側の区域は地形的に、薬師山の北東部と南東部に分けることができそうだ。

南側区域では、7世紀後半の堅穴建物、時期不明の掘立柱建物などが検出され、7世紀後半から

9世紀代の遺物が出土することから、北側区域より少し遅れて集落が展開するようである。北側区域（薬師山南東部）は、発掘調査の件数も多く遺跡の内容がある程度把握されてきている。7世紀前半のL字形カマドを伴う竪穴建物、7世紀後半の竪穴建物、8世紀前半の掘立柱建物、9世紀後半の掘立柱建物、7世紀後半の鍛冶関連の土坑などの他、12世紀頃と考えられる掘立柱建物も確認されている。遺物は7世紀前半から9世紀後半（10世紀代?）にかけてのものが出土する。確認された遺構・遺物より、初期の集落がこの区域に展開することが分かる。北側区域（薬師山北東部）は、現在のところ発掘調査は実施されておらず状況は不明だが、平成13年度に実施した試掘調査において8世紀後半の遺物が出土している。

7世紀前半、それまで墓域だった月津台地上に集落が形成されはじめる時期、薬師遺跡においても、薬師山の南東、谷部の北の区域に初期の集落が展開する。この集落は、渡来系移民の集落であり、製陶・製鉄など手工業生産に関連した集落であったようだ。（出土遺物や立地からみると、どちらかといえば製鉄遺跡と関連するよう感じる）7世紀後半から8世紀前半には、月津台地上の他の集落と同じく盛期をむかえ、谷部の南側や薬師山北東部にも集落域が拡大したと考えられる。その後、9世紀後半（10世紀代?）まで継続し衰退する。

また、12世紀頃の掘立柱建物も確認されており、額見町遺跡や刀何理遺跡と同様に集落の再興が見られるが、それ以降の動向は不明である。おそらく、丘陵部の製鉄遺跡群の終焉とともに姿を消してゆくと考えられる。



● 竪穴建物  
■ 掘立柱建物

● 中の旧地形の範囲については『今江五丁目遺跡』図3 御幸野台地の旧地形（2000 小松市教育委員会）を基に作成した

第33図 薬師遺跡 周辺の地形と遺構の分布 (S=1/4, 000)

## 遺物観察表凡例

### 1. 寸法について

口は口径、底は底部径、高は器高、台は高台径、台高は高台高、基は脚基部径、紐はつまみ径、紐高はつまみ高、頸は頸部径、頸高は頸部高、胴は胴部径、腹長は残存長を示す。

### 2. 色調・焼成について

色調については、土器表面の中で主体を占める色調を『新設 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修）に基づき、その表示方法に従って示した。

焼成は土器の焼成具合を、焼き締まりの強い順から、堅緻—良好—良—不良の4段階で示した。

### 3. 時期について

田嶋明人氏の北陸古代土器編年軸（田嶋明人 1988『古代土器編年軸の設定』『シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題（報告編）』）に基づいている。

また、この編年軸に対する暦年代（右表）は望月精司（小松市教育委員会 埋蔵文化財調査室）の考える暦年代版である。『顕見町遺跡Ⅱ』小松市教育委員会 2007）須原憲・土師器の時期の判定は望月精司が行った。

### 4. その他

石製品材質の判定は宮田明（小松市教育委員会 埋蔵文化財調査室）が行った。

### （南加賀地域古代編年軸と暦年代版）

\*（ ）内は埋蔵文化財資料

遺物編年	遺物名	所在地	調査報告書	色調	焼成	時期	備考
I 1期	古砂陶	北比羅山1号墓	—	(+)	—	7世紀前半	(6世紀末古)
	新砂陶	北比羅山6号墓	丸山内山1号墓	—	—	7世紀前半	
I 2期	古砂陶	北比羅山5号墓	—	—	—	7世紀前半	7世紀前半
	新砂陶	北比羅山7-2号墓	—	—	—	7世紀前半	
II 2期	古砂陶	戸津6号墓	—	—	—	7世紀前半	7世紀前半
	新砂陶	藤原2号墓	—	—	—	7世紀前半	
II 3期	古砂陶	横の木1号墓	—	—	—	8世紀初期	8世紀初期
	新砂陶	戸津8号墓	—	—	—	8世紀前半	
III 期	古砂陶	戸津20号墓	—	—	—	8世紀前半	8世紀前半
	新砂陶	戸津20号墓	—	—	—	8世紀前半	
IV 1期	古砂陶	戸津20号墓	—	—	—	8世紀前半	8世紀前半
	新砂陶	戸津20号墓	—	—	—	8世紀前半	
IV 2期	古砂陶	高宮5号墓	—	—	—	8世紀前半	8世紀前半
	新砂陶	高宮5号墓	—	—	—	8世紀前半	
V 1期	古砂陶	戸津5号墓	—	—	—	8世紀前半	8世紀前半
	新砂陶	戸津5号墓	—	—	—	8世紀前半	
VI 1期	古砂陶	戸津20号墓	—	—	—	8世紀前半	8世紀前半
	新砂陶	戸津20号墓	—	—	—	8世紀前半	
VI 2期	古砂陶	戸津11号墓	—	—	—	8世紀前半	8世紀前半
	新砂陶	戸津25号墓・戸津8号墓	—	—	—	8世紀前半	
VI 3期	古砂陶	戸津44号墓・戸津41号墓	—	—	—	8世紀前半	8世紀前半
	新砂陶	戸津56号墓・戸津38号墓	—	—	—	8世紀前半	
VII 1期	古砂陶	戸津18号墓・戸津47号墓	—	—	—	8世紀前半	8世紀前半
	新砂陶	戸津18号墓・戸津47号墓	—	—	—	8世紀前半	
VII 2期	古砂陶	二ツ堂一貫山F区8号土坑	—	—	—	8世紀前半	8世紀前半
	新砂陶	二ツ堂一貫山F区8号土坑	—	—	—	8世紀前半	
中-1-1期	古砂陶	—	—	—	—	8世紀前半	8世紀前半
中-1-1期	古砂陶	—	—	—	—	8世紀前半	8世紀前半

『顕見町遺跡Ⅱ』（小松市教育委員会 2007）より転載

番号	出土位置	種別	器種	寸法 (cm)	残存	色調	焼成	時期	備考
1	表採	須恵器	坏A	口13.9	1/26	2.5Y7/1 灰白	良好	III	
2	SK06	須恵器	坏A	底6.8	1/3	5Y7/1 灰白	良好	III	
3	表採	須恵器	坏A	底9.0	1/4	10Y7/1 灰白	良好	IV1~IV2古	
4	表採	須恵器	高坏	基4.1	—	7.5Y6/1 灰	良好	6c前	
5	2-5Gr	須恵器	甗A	口13.9 高1.7	1/12	2.6Y7/2 灰黄	良	VI2	
6	SK08	須恵器	坏B身	口14.8	1/6	N6/1 灰	良好	III	
7	3-5Gr	須恵器	坏B身	口12.8	1/2	2.6Y6/1 黄灰	良好	III	
8	SK08	須恵器	坏B身	台8.7 台高0.7	3/5	N5.5/1 灰	良好	III	
9	SK08	須恵器	坏B身	台9.2 台高0.5	1/2	7.5Y6/1 灰	良好	III	
10	SK08	須恵器	坏B身	台10.0 台高0.5	1/4	N5/1 灰	堅緻	III?	
11	SI10	須恵器	坏H蓋	口13.8	1/7	2.5Y7/1 灰白	良好	I 1	
12	SI10	須恵器	坏H蓋	—	—	5B6/1 灰	良好	I 1	
13	SI10	須恵器	坏H蓋	—	—	7.5YR7/4 にぶい橙	不良	I 1	
14	2-5Gr	須恵器	坏B蓋	口15.0 高2.7 紐2.7 紐高0.5	1/2	2.5Y7/1 灰白	良好	III	
15	SB06 (P45)	須恵器	坏B蓋	口14.0	1/12	N6/1 灰	良好	III	
16	6-4Gr	須恵器	坏B蓋	紐3.3 紐高0.7	—	7.5Y6/1 灰	良好	III	
17	表採	須恵器	坏B蓋	紐3.0 紐高1.3	—	N6/1 灰	良	IV	
18	4-2Gr	須恵器	罎	口9.2	1/7	N5/1 灰	良好	7c中~後?	金属器焼成
19	SB06 (P45)	須恵器	短頸甗蓋	口13.0	1/12	10YR6/1 灰	良好	III?	
20	3-5Gr	須恵器	広口甗?	口22.0	1/7	5Y5.5/1 灰	良好	—	
21	2-5Gr	土師器	赤影罎	口12.9	1/7	2.5YR6/6 橙	良	III?~III?	内外面赤彩
22	SB07 (P99)	土師器	外赤彩内黒施罎	口13.2	1/7	5YR6/6 橙	良	VI	
23	P109 (3-5Gr)	土師器	小釜	頸11.0 胴12.8 底6.0	—	2.5YR5/3 にぶい橙	良好	VI	
24	SI10	土師器	小釜	口12.0 頸11.0 胴高1.6	1/7	7.5YR7/6 橙	良	I 1	
25	SI10	土師器	小釜	口16.8 頸15.3 胴高2.3	1/18	7.5YR7/4 にぶい橙	良	I 1	
26	SK08	土師器	小釜	口15.2 頸14.2 胴高1.9	1/9	2.5YR6/4 にぶい橙	良	III	
27	SK08	土師器	罎	口41.0 頸37.0	1/7	7.5YR7/4 にぶい橙	良	III	

第13表 薬師遺跡 遺物観察表 1

番号	出土位置	種別	名称	寸法 (cm)	備考
28	S110	鉄製品	鉄鏝	残長4.8 幅3.7 厚0.5	
29	SK08	鉄製品	刀子?	残長4.8 幅1.3 厚0.7	
30	SK08	鉄製品	不明	長9.9 幅4.9 厚1.0	
31	SK08	石製品	石鏝	長5.9 幅5.6 厚1.7	重271g 火山礫凝灰岩
32	SK08	石製品	石帯 (丸柄)	長2.8 幅3.7 厚0.7	津賀頁岩

第14表 栗師遺跡 遺物観察表2

引用・参考文献

- 小松市教育委員会 2000 『今江五丁目遺跡』  
 小松市 2002 『新修 小松市史 資料編4 国府と荘園』  
 小松市教育委員会 2003 『栗師遺跡』  
 小松市教育委員会 2003 『林製鉄遺跡』  
 小松市教育委員会 2006 『額見町遺跡Ⅰ』  
 小松市教育委員会 2007 『額見町遺跡Ⅱ』  
 小松市教育委員会 2007 『小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅲ』





調査前全景



調査前全景 (除草後)



1号製鉄炉 検出状況



1号製鉄炉 土層堆積状況 1 (A-A' アゼ)



1号製鉄炉 土層堆積状況 2 (B-B' アゼ)



1号製鉄炉 発掘全景



排滓場 掘下作業



排滓場 積雪状況



排滓場 土層堆積状況1 (C-C' アゼ)



排滓場 土層堆積状況2 (C-C' アゼ)



排滓場 土層堆積状況3 (D-D' アゼ)



排滓場 土層堆積状況4 (D-D' アゼ)



排滓場 完掘全景1



排滓場 完掘全景2



排滓場 完掘全景3



出土遺物 洗浄作業



鉄滓 (炉内滓)



鉄滓 (炉内滓)



鉄滓 (炉内滓)



鉄滓 (炉外流出滓)



鉄滓 (炉外流出滓)



鉄滓 (炉外流出滓)



鉄滓 (炉外流出滓)



鉄滓 (炉外流出滓)



炉壁



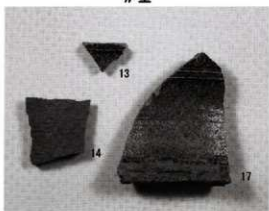
炉壁



炉壁



碗



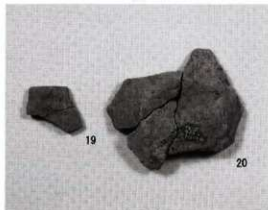
甕



壺



瓶



土師器碗



調査前全景 1



調査前全景 2



調査前全景 3



主体部調査区 掘下作業 1



主体部調査区 掘下作業 2



主体部調査区 白土出土状況



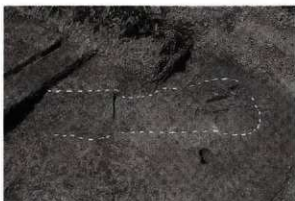
主体部調査区 遺物出土状況 1 (刀子・櫛)



主体部調査区 遺物出土状況 2 (刀子・櫛)



主体部調査区 完掘全景 1



主体部調査区 完掘全景 2



トレンチ調査区 Aトレンチ完掘全景



トレンチ調査区 Cトレンチ掘下作業



トレンチ調査区 Cトレンチ器台出土状況 1



トレンチ調査区 Cトレンチ器台出土状況 2



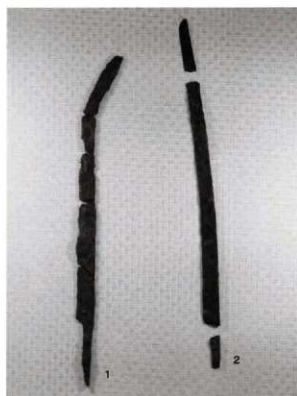
トレンチ調査区 B, Cトレンチ完掘全景



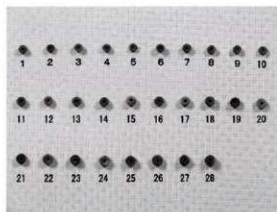
現地説明会の様子



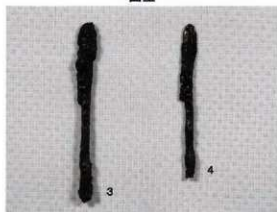
白玉



鉄刀



白玉



鉄鏃



鉄鏃



鉄鏃



鉄斧



器台



器台



高坏



壺



壺





調査地



表土除去



遺構確認作業



S110 (北東より)



S110 (南東より)



S110完掘 (南東より)



S110完掘 (北東より)



SB06



SB07



SB08



SK05



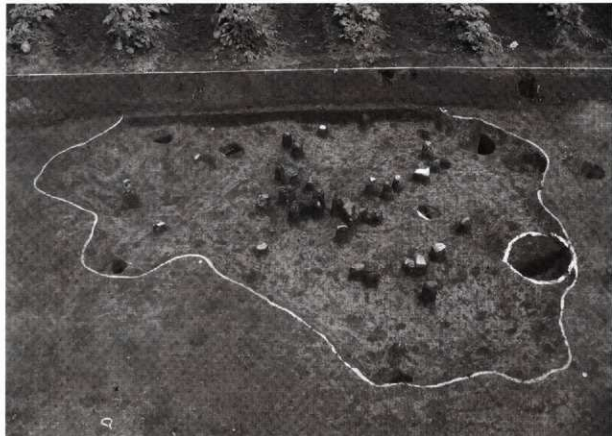
SK06



SK07



SK08



SK08遺物出土状況



調査区全景（西より）



調査区全景（北より）



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



28



27



29



30



31



32 (表)



32 (裏)

## 報告書抄録

ふりがな	こまつしないいせきはつくつちょうさほうこくしょ4							
書名	小松市内遺跡発掘調査報告書IV							
副書名	戸津シンブザワ遺跡・埴田後山明神4号墳・薬師遺跡							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	板下義規・岩本信一							
編集機関	石川県小松市教育委員会							
所在地	〒923-8650 石川県小松市小馬出町91番地 TEL 0761-22-4111							
発行年月日	2008年3月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とよ 戸津シンブ いせ ザワ遺跡	いしかわけんこまつしよとよまほ けつしよまほ 石川県小松市戸津町・林町	17203	03007	36度 19分 54秒	136度 26分 17秒	1999.10.19 § 2000.03.23	400㎡	記録保存
はらだてしんぶ 埴田後山 明神 4号墳	いしかわけんこまつしよはらだてまほ 石川県小松市埴田町	17203	03242	36度 24分 17秒	136度 31分 09秒	2000.08.01 § 2000.08.11	20㎡	畑耕作中 の主体部 発見
やくし 薬師遺跡	いしかわけんこまつしよやくしまほ 石川県小松市矢崎町	17203	03138	36度 21分 57秒	136度 26分 20秒	2006.04.24 § 2006.06.08	350㎡	店舗建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
戸津シンブ ザワ遺跡	製鉄跡	平安	製鉄炉 構壇場	鉄滓、炉壁、須恵器、土師器				
要約	一部削平・擾乱を受けていたが、製鉄炉1基とそれに伴う構壇場を検出した。時期は出土土器や周辺遺跡の様相から、10世紀前半頃に位置づけられる。							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
埴田後山 明神4号墳	古墳	古墳	主体部 周溝	須恵器、土師器、鉄刀、鉄 鏃、鉄弁、刀子、櫛、白玉				
要約	主体部の大部分は削平されていたが、出土遺物状況等によりその範囲を推定できた。また周溝 検出により、直径約19mの円墳と判断された。古墳の時期は5世紀後半と考えられる。							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
薬師遺跡	集落	飛鳥～平安	竪穴建物 掘立柱建物	須恵器、土師器、鉄鏃、石 帯(丸柄)				
要約	7世紀前半から9世紀後半にかけて営まれた集落跡。厳治関連遺物の出土より、鉄製品を生産 に関連した集落であることも推測できる。							

小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅳ

戸津シンブザワ遺跡・埴田後山古墳群・栗師遺跡

発行日 平成20(2008)年3月28日

発行者 石川県小松市教育委員会  
〒923-8650 石川県小松市小馬出町91番地  
TEL 0761-22-4111

印刷 株式会社 ゲンダ美術印刷